

平成11年度・第1回 秋田大学教養基礎教育ワークショップ

開催日：平成11年10月6日（水）午後1時30分受付開始

会場：秋田ビューホテル

テーマ：教養基礎教育自己点検・評価報告書を読む

プ ロ グ ラ ム

13:30～13:50 受 付

14:00～14:10 開会説明

14:10～17:30

〈基調報告〉

- | | | |
|--------|---------|-------------------------------------|
| 工学資源学部 | 田 上 道 弘 | ～第2章 教養基礎教育の教育内容方法等
1. カリキュラムの編成 |
| 教育文化学部 | 中 村 裕 | ～第2章 教養基礎教育の教育内容方法等
2. 教育内容 |
| 医 学 部 | 増 田 弘 毅 | ～第2章 教養基礎教育の教育内容方法等
3. 教育方法等 |
| 教育文化学部 | 西 江 秀 三 | ～第3章 教養基礎教育の実施体制～ |

〈個別授業報告〉（順不同）

- | | | |
|--------|---------|--|
| 教育文化学部 | 村 上 東 | |
| | 今 野 和 夫 | |
| | 小賀野 晶 一 | |
| 工学資源学部 | 大 好 直 | |

ほか

〈意見交換〉

17:30～17:40 閉会・挨拶

17:50～ 懇 親 会

平成11年度教養基礎教育ワークショップの概要

私おととい突然司会をやって下さいということをお願いしまして、工学資源学部におります加賀谷と申します。それからもうひと方司会の先生をご紹介したいと思います。

教育文化学部の三浦と申します。私も昨日通知を受けましてこの場に立っておりますが、今日はよろしく願いいたします。

それでは開会に先立ちまして、教養基礎教育主管の熊田先生より開会のご挨拶をお願いいたします。よろしく願いいたします。

熊田でございますが、第1回目のワークショップの開催に当たりまして、一言ご挨拶をさせていただきます。

昨年もそうでしたけれども、このワークショップの開催の日取りが本年度も秋季休業中とはいえ、学会の重なるシーズンにぶつかってしまいまして、参加予定の先生方の中にも欠席の方がかなり出てしまいました。残念ではありますけれども、本年度のこの第1回目のワークショップの趣旨は2度ほどご案内申し上げましたように、平成10年度、昨年度出発いたしました教養基礎教育の1年間の経験を踏まえまして、その自己点検評価の作業をいたしまして、事前にお配りいたしましたような自己点検評価報告書のゲラ刷りが出来上がりましたもので、それを昨年度の反省を踏まえまして資料にしながら今年度、来年度以降の教養基礎教育の教育内容、方法、あるいは実施体制の見直し、改善に資したいというのが趣旨であります。昨年教員はもとより学生諸君を対象にしまして個別の授業の内容、教養基礎教育の全体像についてたくさんの方々にアンケートご協力をいただきました。その成果をもとにしまして、教養基礎教育の調査研究委員会が中心になりましてお手元のような120ページを超える報告書の中身がその輪郭を見せたということになります。今回はこの自己点検評価報告書の原稿を執筆された担当者の方、これは個別の授業担当の先生を含めてですが、その自己点検の中身につきましてご報告いただいて、それを土台にして質疑応答をしたいと。いずれにしてもあと3年後には1クールが終わって教養基礎教育の2クール目に突入するということになりますもんですから、それに向けて毎年毎年、その内容の見直しをしなければならない。その第一歩としては少し早い感じもしないでもないんですが、その報告書の中身につきまして、それからここに記載されずに残っているような問題等につきまして率直な意見交換をいただければと思っています。なおこの1回目のワークショップにつきましては、その内容を近々発行予定のフォーラムないしは研究年報の方に掲載したいと思っております。為に、録音をさせていただくこととなりますけれども、それはどうぞ頭の隅に少し残したぐらいに寄せておいていただきまして、本当に率直なご意見をいただければ大変ありがたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

引き続きまして、基調報告ということになりますけれども、司会の進行をあらかじめご説明申し上げます。緑色のプログラムが皆様のお手元に配布されておると思っておりますけれども、報告書の都合によりまして、この順番にはちょっと進行ができませんのであらかじめお伝えしておきます。

まず一番最初に教育文化学部の西江先生に基調報告をいただきまして、その次に工学資源学部の田上先生からご報告をいただきます。この2件のご報告が終わったところで質疑応答を、ディスカッションを行いたいと思います。それが終わりますと、若干コーヒープレイクを取りまして、それから引き続きまして医学部の増田先生にご報告をいただきます。それから4番目に教育文化学部の中村先生のご報告をいただくと、いうことにいたしたいと思います。それが終わりました段階で、また質疑応答をいたしまして、コーヒープレイクをとということにします。で、引き続きまして個別授業報告を行います。このプログラムには4人の先生方のご報告がございますが、その他数人の先生のご報告がございます。それから終わりますと意見交換ということで数分、あるいは数十分になるかもわかりませんが、意見交換をいたしまして閉会をいたしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは最初に教育文化学部の西江先生にご報告をいただきたいと思っております。

教育文化学部の西江です。着席して報告させていただきます。

今日配られましたお手元の資料の、緑色の紙をのぞきますと1, 2, 3, 4, 5枚目の教養基礎教育の実施体制についてというのが、本来この自己点検評価は調査研究委員会がメインになる仕事なのですが、運営委員会の方のメンバーによってこの実施体制については自己点検評価を行うということになりました。従って各学部の運営委員会の構成メンバーの方々との共同作業ということですが、それについて今日は簡単にご報告させていただきます。

まずお手元のその資料の1番目の項目で、全学出動体制という項目から始めさせていただきますが、一番最初の現在の体制に至るまでの経過について、簡単に箇条書きですけれども書いておきました。平成3年度まで、いわゆる一般教育と言われていた時代ですけれども、この時代には全学の委員会としては一般教育運営協議会というのがございました。これは学長及び各学部長、一般教育主事、学生部長、それから教育学部の一般教育科目の区分から各1名、あるいは専門教育教官、教育学部から3名、医学部から若干名、そして鉾山学部の各学科から1名というかなり大きな協議会でした。しかし実質的にはその次にあります一般教育教官会議、これは教育学部の教官によって構成されるといいますか、一般教育主事とそして一般教育を担当していた研究室から各1名という形で構成されておりました。実質的に一般教育を実施していたのがこの一般教育教官会議が主体となっておりましたので、この時には理念的といえますか、協議会では無論全学的に一般教育のことは行っていたのですけれども、自治体制がやはり教育学部に属していましたから、必ずしも全学出動体制ということが名実ともに備わっていたとはいえないと思われまして、で、平成4年度から一般教育の改革がございまして、総合基礎教育運営協議会、そして総合基礎教育実施委員会という形で、総合基礎教育運営協議会の方はこれは全学の協議会で学生部長を委員長として一般教育主事、そして各学部代表2名、総合基礎教育実施委員会から2名、それから医療技術短期大学部からオブザーバーとして1名によって構成される委員会で、一般教育運営協議会より若干小さな協議会になっております。その一般教育教官会議は総合基礎教育実施委員会という名称に改められまして一般教育主事を委員長にし、そして教育学部の教授会によって選出された副委員長が2名、そして教育学部の各教科主体で選出した委員が1名ずつ、そして教務委員会から1名という構成で行われておりました。

この総合基礎教育実施委員会が実際の総合基礎教育の実施主体でありましたので、この構成もやはり教育学部だけということで、全学出動体制ということが実施の隅々のレベルまでは至っていなかったという、そういう状況でした。今回の平成10年度の教養基礎教育体制の改革が行われたわけですけれども、このとき挙げられたのに5つの基本方針がありまして1から5まであります。特に下線部を引きました3のところ、教養基礎教育の実施運営のための全学的な組織の確立というところがこの実施体制における一つの基本方針ということになると思えます。他の部分は教育内容とかカリキュラム等にかかわりますので、後にまた報告があると思えます。平成10年度からはご承知のように、全学の教育委員会を筆頭に教養基礎教育運営委員会、そして教養基礎教育調査研究委員会、そして各学部の教養基礎教育委員会といういろいろな形での構成となりまして、実施体制としては各学部が基本的に同じ立場で、同じ様に教養基礎教育にかかわるという、そういう名実ともに実施体制が出来上がっているわけです。

ま、ここまでが全体の運営実施態勢についてなんですけれども、その次にそういう実施体制といえますか、組織の問題だけではなくて実際に授業を担当して、担当における全学出動体制がどういった形になっているかという、これは単に数字といえば数字だけなんですけれども、その一覧表にありますように教養基礎教育体制に移行してからは教育文化学部、医学部、工学資源学部で、かっこの内はその学部の教官数ですけれども、それに対応してどれくらいの方々

が教養基礎教育の授業を担当しているかという数です。ちなみにこの場合は初年次ゼミは全部省いております。初年次ゼミについては全員参加ということが建前ですので省かせていただきました。その横にあるのが各学部での開講科目数及び時間数が掲げられております。そしてさらにこの場合、表にはしませんでしたけれども上の方から実際に教養基礎教育の授業に対してどれぐらいの時間数を担当しているか、というのを調べた表が実際に自己点検評価の方にはございます。それを見ますとやはりこれは予想されることなんですけれども、外国語の関係の人間の授業担当数あるいは授業時間数がかなり多いと、そういう結果が出ております。ただ20名中、15名までが国際言語科目の担当者であって、後は音楽、情報、政治学、法律、哲学等の担当者ですので、科目とかその分野によってだけではなくて、やはり各教科の個人的な対応というのでもかなりこの授業時間数には反映されているのではないかというふうに思われます。

その次、そこに星印の2番目ですけれども、科目別受講者数についてはまだこれ現在全体の資料にはついていないんですけれども、第4表の資料に掲載される予定です。科目別受講者数、これはカリキュラム編成の中でできるだけ一つの授業に大人数が集まらないようにということでカリキュラムが立てられているんですけれども、現実的には様々な理由で、特に目的主題別科目においては300名ぐらいのクラスがあったり、非常にばらつきが多いわけです。これについてはやはり時間割上の問題も確かにあるんですけれども、そこに書きましたように、延べで単純計算しましても学生が目的主題別科目において必要な単位数、そして開講されている授業科目数、相対的に全部合わせて平均しますとやはり1クラスが70名ぐらいにはどうしてもなってしまうと。これが講義科目ですので多いのかどうかというのはいろいろとご意見があると思いますけれども、やはり授業において双方向的なコミュニケーションを考えた場合にはやはり人数は減らしたいところであるということです。ここには目的主題別科目数の増設等を検討すべきことと思われると書きましたけれども、これは教室とか講義室とまた絡んでくる問題ですので、そう簡単にはいかないと思いますけれども、総合基礎教育時代よりもいわゆるこういう講義科目数が少なくなったということは事実でして、今後やはり検討すべき課題であると思います。

以上が全学出動体制についての簡単な報告です。2番目に実際の実施運営委員会等について簡単に触れたいと思います。教養基礎教育運営委員会と学部の教養基礎教育委員会という大きな項目ですが、1番目に教養基礎教育運営委員会についてです。平成10年度は9回の委員会が開かれました。で、いろいろ予算とかあるいは事業運営に関して審議してきたわけですけれども、初年度ということもあって、あるいはまた対応を迫られている問題がかなり次から次へとやってくることもありまして、なかなかそれぞれについて必要十分な論議を尽くせたかというところ、やはりもう少し余裕が欲しかったというところもございます。そしてこういうところを踏まえて、平成10年度からは運営委員会において1年間の経験を踏まえ、年間にどういう形の検討依頼とか、あるいは予算請求とかそういったものが来るかとかいうことを一覧表にしまして、できるだけ早急にあらかじめ対処するように現在努力しているところです。またその次の段落なんですけれども、教養基礎教育運営委員会、運営という名前ついていますが、どちらかというと審議決定委員会という形になってまして、実際の時間割作成とか、あるいは教養基礎教育の運営に関しては平成10年度に関してはその都度の臨時委員会あるいはワーキンググループによって対処してきました。本来はそういったものは教養基礎教育実施部会及び基礎教育実施部会において取り扱うべきことです。しかし昨年度はちょっと一番最初の年度ということもありまして、なかなか実施部会もうまく動けませんで、今年度は特に時間割作成あるいはカリキュラム編成等に関しまして、これからですけれども、実施部会が実際に活動するようになる

だろうと思われます。

2番目に学部の方の教養基礎教育委員会です。教養基礎教育委員会は一番最初に書きましたように、運営委員会と学部をつなぎながら全学出動体制の各学部における支柱として設立された、つまり全学体制を根底から支える、そういった委員会であるという位置付けです。それぞれの学部において特に審議事項として行わなければならないのは非常勤講師の任用計画、そしてまた運営委員会によって依頼され、そして学部において検討すべき事柄をこの委員会で検討してきました。医学部、工学資源学部の学部委員会、これはもしかしたら教養基礎教育委員会という名称というままではないかもしれませんが、これに準ずる委員会では平成10年度から本格的に始まった全学出動体制を支える委員会として、この2つの委員会は私が各学部の委員長からいただいた活動内容を見る限り、よく機能して活動してきたと思われます。教育文化学部の方の委員会は平成10年度5回の委員会を開きましたけれども、教育学部時代一般教育、総合基礎教育を現実的に実施していた学部というこれまでの経緯が、ちょっと表現が難しいんですけれども、学部としての独自の活動を展開してする上であまり有効にちょっと働かなかった部分もあります。これは現在の委員長である私の責任でもあるんですけれども、今後全学の運営委員会と学部の教養基礎教育委員会との関係の調整をさらに検討していかなければならないと思われます。

3番目です。教養基礎教育調査研究委員会、これは今回の教養基礎教育改革の大きな一つの日玉の委員会です。上記5つの基本方針中、教養基礎教育の恒常的な充実改善のための調査研究組織の確立の具体化として設立された委員会で、平成10年から11年にかけて今回の自己点検評価における中心的な役割を担っている、あるいは担ってきたということです。その具体的な内容としては学生や教官に対する授業アンケートの実施、ワークショップの開催、研究年報の発行など教養基礎教育運営を支える調査研究委員会としての機能を十分果たしていると思われます。この調査研究委員会の中には3つの恒常的な小委員会、広報委員会と調査研究委員会、それからFD委員会、そして特別小委員会として現在あるのは外国語特別小委員会ですけれども、そういった小委員会が実質的に活動しながら全体の委員会としての機能というか、活動を支えているという非常にいい形になっていると思われます。

4番目、委員会規定の自己点検評価という項目ですが、これについては特に記載しませんでした。それほど大きな問題はないと思われたからなんですけれども、1つだけお手元の教養基礎教育自己点検評価報告書の121ページなんですけれども、121ページの項目の1番目になるんですけれども、秋田大学教養基礎教育運営規程について、この規程について特に問題になることはないと思われる。ただ第5条の2に学部の教養基礎教育委員会に関して必要な事項は各学部において別に定める、とあるが現実的には各学部の委員会に関する明文化された規定はなく云々と書いてありますが、これは私の全くの間違いです。規程集には実は載ってないんですけれども、実際にこれが作られ、現実的に機能しております。そして実際に教養基礎、教育学部の委員会を立ち上げるときに、それを使いながら私が説明した記憶も後からまざまざと蘇ってきて、私のミスですので、これは変えます。ただ1つだけ言えることは、学部の教養基礎教育委員会だけではないんですけれども、各種委員会に関する規定等がすぐ目に触れる形でなかなかないという現状が多分あるんだろうと思います。教養基礎教育に関してもあるいは学部の教養基礎教育委員会を含めた各種委員会についてもいわば情報化の時代なので、その委員会規定等がいつでも手元で見れるというような形にされるのが望ましいのではないかと思います。印刷所とか、例えば大学規程集に載せるとしたら、それだけで分厚くなってしまおうので対処の仕方があると思いますけれども、これについては今後検討していった方がいいのではないかと思います。

れます。

5番目の施設整備についてです。1番目講義室，実験室についてですが，講義室に関してはやはりその数が不足気味であって，なかなかその開設科目の内容に見合った教室，つまり受講者数に見合った内容が確保しにくい。現実的に教養教育においてもあるいは基礎教育においても本来は教室を変えたいんだけど，その人数に見合う教室がないために補助椅子を出して対応しているとか，そういった形があります。これはなかなかちょっとすぐには解決できない問題ではありますけれども，今後やはりもう少し講義室等の増大と充実に向けて努力すべきではないだろうかとは思いますが。そして講義室の形態についてなんですけれども，マルチメディアに対応する教室が少ないということですね。これも今の現代という時代を考えれば出来るだけいろんな形で対応するように考えるべきだと思います。それから実験室に関してですが，これは教育学部の旧教育定員の理科系の先生方が工学資源学部の方に移られたということもありまして，実験室までの距離も結構遠くなっております。そしてまた実験室としての役割から言っても，場合によっては複数設置された方が望ましいだろうという，そういう評価。ま，自己点検です。それから2番目に機器設備についてですが，この機器設備については大好先生にこれは担当していただいたんですけれども，一般教育1，2号館に関しては大体よく揃っている。暗幕スクリーン，OHP，VTRはまずほとんど問題はない。ただ一部の教養基礎教育の授業が充実され，教育文化学部の方の教室が上記機器の設備がちょっと不足しておりますので，今後の対応が望まれる。これについては全面改修ということが1月ぐらいから始まりますんで，その中で何らかの対応が出来れば望ましいと考えられます。3番目に図書ですけれども，図書については秋田大学の図書館というのはやはり蔵書数において若干劣るといえるところがありますけれども，特に一般図書，で教養基礎教育に最も関連が深いと思われる一般図書，特に新刊図書等の充実がやはり望まれるといえますか，すなわち県立図書館であるとか，あるいは市立図書館などの方がよりバラエティーに富んで現在の学生が興味関心をもつであろう，そういう図書が揃っているという，そういう現状がありますんで，これから先，恒常的に図書については選定を考えていかなければいけないだろうと思います。それについては方法としては現在のところ，少なくとも教育文化学部配分された額については専門と同じように各研究室で選定していただいておりますけれども，学部あるいは全学的な合意ができれば図書選定委員会的なものを教養基礎教育の内部において，そしてそれをどういう形で選定するかということを考えてもいいのではないかと思います。

6番目の予算です。これは実は執筆は中村先生にお願いしたところです。1番目に教養基礎教育運営経費についての平成10年度の公費から共通経費留保額を引いた運営予算として3,460万円っていうのが出ております。配分の方針としてはご存じのように教室等整備などの必要度の高い経費に重点配分するという事，そして例えば授業運営費については担当コマ数，時間数等を考慮して，1コマ当たり単価に基づき配分するという事。そして初年次ゼミについては学生定員数に応じ学部毎に配分し，学生一人当たりの単価は1,000円とする，という形で配分いたしました。このような形での配分，特に授業運営費配分方法については学部の予算配分方法と異なる，少なくとも教育文化学部では異なるわけですけれども，全学体制によって運営される教養基礎教育においてはやはりこのような方法が客観性，あるいは透明性という点から妥当ではないかなというふうに思われます。2番目に特別経費としては平成10年度にはそこに書いてあります教育改善推進費として2件，そして2番目に大学改革推進等経費中の特別経費としてその2件が申込され，そして審議の結果了承され配分されました。

7番目の事務組織，簡単に2行で書いてありますけれども，教養基礎教育の改革に伴ってやは

り事務組織が学部ではなく本部に属する事務組織としての教務企画室が設置されて、教養基礎教育のカリキュラムの問題あるいは授業運営の問題あった時に事務方として全面的に対処していただいています。ただその存在と業務内容が必ずしも学部レベルまで徹底していない面もありますので、これから広報活動あるいは宣伝等を工夫しながらよりその存在を印象づけるという形で努力していくべきだろうと思われまます。

簡単ではありますが、以上で教養基礎教育の実施体制、第3章に関する簡単な報告を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

それでは、引き続きまして工学資源学部の田上先生に基調報告をお願いいたします。

工学資源学部の田上です。それじゃちょっと座らせていただきます。

私共が担当しましたのは、目次のところちょっと見ていただきますと分かりますように、第2章で教養基礎教育の教育方法等というところありますけれども、その中の1番カリキュラムの編成、ここをうちの方の学部で担当しております。それで今日私がちょっと全体をお話するわけですが、ここを担当したのが私と今日司会をされております加賀谷先生、それからもう一人情報工学の山口先生、3人でここを担当しております。

それじゃそれに沿って簡単に紹介していきたいと思えます。それで11ページを見ていただきたいと思えます。ここで主に授業科目の区分と構成ということでもありますけれども、そこでその教養基礎教育科目というのは改革されてから初年次ゼミと、それから目的主題別、国際言語科目及びスポーツ科学、それと基礎科目をなしておりますけれども、私共主に取り組みましたのがですね、新しく導入されました初年次ゼミ、それから目的主題別とそれから一部、全部というわけにはいなくて基礎教育科目のほんの一部を取り上げました。というのは国際言語とスポーツ科学というのは後でこの部分を取りまとめるということもあまして、その部分を一部省略させていただきました。

それですまず最初に初年次ゼミ、これは新しく改革されてから初めて導入されたというわけがあります。この内容については今年度3月でしょうか、1冊の本に全体まとめられておりますので、まだ私共まとめている時点では完全にまだ出来上がっていないという状態でまとめたものです。一部出来たのを見ていただきたいと思えます。まず初年次ゼミでこれは先生方とそれから学生のアンケートを集録したものです。それですまず最初の表の1というのが出ておりますけれども、これは先生方の初年次ゼミに対する取り組みというのを、そこに表のアンケート結果です、そこにこのところにはちょっと出ていないんですけれども、一部そこに私、初年次ゼミという意義と目的と、ここには詳しく出ておりませんが、そこに1番目から5番目までそこに11ページの表の手前ところを書いてありますけれども、そういう初期の目的というのがあるわけです。そういうのは別個にして、まずアンケートをちょっと見ていただきたいと思えます。それによりますと、各学部で初年度のこともあまして非常に有効だったというのが先生方の結果として比較的少なく、今後の課題というか、今後改善していくということも含めるとかなり多くなりますけれども、積極的に賛成というか、そういうの非常に少なくなっているというのがアンケート結果でわかります。それに対して学生の方のアンケートはどうなっているかといいますと、次のページを見て下さい、12ページの方。そこで先生方は割合厳しい評価というか、なっていますけれども、学生の方は満足と総体的に満足というものを加味しますと、非常に高い割合になっております。その意義とか、そのへんのところ学生はあまり理解

していないという面もあるんですけども、比較的先生方のアンケート結果に対してよりは学生の方が非常に高くなっているというのがわかります。そういうわけで、これは初年度ということもあるんですけども、今後先生方のほうはかなりそういう意味では改善というか、混乱しているというか、そういうところが多少見受けられます。それに対してそういう目的からしたらどうかということで、ちょっと私自身が感じておるのをそこにちょっと12ページの最初のところに入れておりますけれども、目的の方でオリエンテーションとか学科が入って自ら学ぶというのは普通入学式でかなり各学部、あるいは学科でも非常に熱心にやられていると思います。そういう意味ではその部分はかなり開設されたということ、従来とはそんなに変わらないのではないかと思います。ただしその2番から4番ぐらいのところ、そのへんが例えば私共の学科からしますと、これ4年間で例えば卒業研究とかそういうのを発表してしまうわけですけども、そういう形の部分がもう1年生から入っておりますので、そのへんがかなり今後の課題ではないのかなと。特にここにはちょっと書いておりませんが、少人数ということが、例えば20名程度というのをうたっております。目的のところにもかなりうたっておりますけれども、こういう学部あるいは学科で非常にそういう面では、多いところでは例えばグループでやっていかざるを得ないのか、あるいはやっているということなのか、そのへんが多少今後解決していかなければならない問題ではないのかなと考えました。

それから、13ページのところちょっと見ていただければわかりますけれども、これは昨年のワークショップで出されている問題の1つですけども、例えば初年次ゼミで成績評価だとか不合格者をどうするのかというのも一部昨年のワークショップで出ております。まあそのへんもまだどうしていくかというのを解決というか、これも今後課題が残されいくのではないかなというふうに思っております。そのへんが初年次ゼミのアンケート調査と目的からちょっと合わない部分とか例えば問題点が指摘されていると、そういう部分をこんな形で整理しました。

それから次が目的主題別の13ページのところをちょっと見ていただきたいと思います。それで目的主題別というのは、これも先生方のアンケートと学生のアンケートと両方が出されております。それでそこにも先生方の結果でも非常に各学部でちょっとバラバラになっております。それで有効だというのと、変わらないというのがそこにありますけれども、それを問題はあるにしてもまず肯定というふうにしますと、かなりのある一定の割合になっていると思います。それに対して学生の方のところをちょっと見ていただきますと、アンケートでは現状でいいとする、14ページのところですけども、学生のアンケートの結果見ていただきますと、教育文化学部ではその数字の、そこに80と出ておりますけれども約44%程度、それから医学部では39%ぐらい、それから工学資源学部では47%ぐらい。そうしますと大体そこに書いてありますように40から47%程度で、かなりそういう意味ですと多い結果になっているというのがわかります。それでその他の意見として、拡大すべきだとか、目的主題別を縮小すべきというふうなこともその程度の数字になっております。その中で少し14ページのところで下の方にですね、学生のアンケート結果では目的主題別科目について3割程度が拡大かあるいは縮小の対象とする領域として挙げておると。それでこの部分は後でまた、後の担当の部分で出てくると思っておりますけれども、工学資源学部の学生のアンケート結果では新しい科目の開設を希望する割合も多くなっていると。そこで今後このへんを踏まえますと、定期的に新しい科目の開設と改善について、さらに考えていく必要があるのではないかと考えられます。

それから基礎教育科目というのは他にこのアンケートにもあるんですけども、その中で特に初めの初年度に導入されました入門物理学とそれから入門化学というのがありますけれども、これも昨年のワークショップで一部出されておまして、改善されたという結果も、次の年か

らかなり改善されているというふうに考えておりますけれども、そこに書いてあります下の方の3行目ですね、同じ科目を受講する学生が多くなった結果、教室に受講者数を収容出来ないで変更するという、非常に多くなったり少なくなったり、あるいは学部で受講する条件などについて指導することが望まれると。これは初年度の問題が出されておまして、次年度からかなりまた改善されているのではないかというふうに考えます。以上がその最初の方で、次に履修基準というところに移りたいと思います。

履修基準は15ページと16ページ、ここに各学部の履修基準というのが記載されております。そこでその結果を踏まえた上で17ページを見ていただきたいと思います。これについては総単位数のアンケート結果が実施されております。それで総単位数は現状のままでよいと考えておられる先生方と、それからそれは各学部毎にアンケート出されておりますけれども、そこではちょっと学部によって違いますけれども、各学部の全回答数の半数以上が大体肯定をしているという結果になっています。それと同じようなことが総単位数について学生のアンケート調査の結果では、それに比べるとちょっと低くなって、文章の中にありますけれども、大体10%程度下がっていると。そのへんが先生方との結果とちょっとズレていると。先生方が多いのに対して、学生のアンケート調査の方が少し総単位数では10%下がっているということが多い回答者になっております。だから10%~20%先生方のアンケートの結果と学生さんの方のアンケート結果はズレているということが分かります。

それから先ほどの新しい科目とかそこも同じようなことが出ておりますけれども、そういうことから考えますと、履修基準の総単位数ということでは現状のままでよいのではないかということが考えられると。それから教養教育及び基礎教育科目の内容と量的バランスについては、その上の方にもちょっと書いてありますけれども、各学部毎に専門との関連性を考えて定期的に検討する必要があると。一番最後の文章ですけれども。そこに書かれておりますけれども、学部によって縮小とか拡大とか、それから新しい科目、工学資源学部の方では新しい科目というのが割合多くなっております。その4行目から5行目のところにちょっと数字が出されております。そういうわけで履修基準に関しては各学部とも大体肯定されている内容というふうに、先生方のアンケート結果と学生さんの方のアンケート結果がそういう形になっていると思います。

それから次が18ページの時間割について移りたいと思います。これは時間割に対する初年度実施状況と問題点ということで、そういうこととそれから授業選択の自由度の保証についてと、その2点について主に検討したものです。それで目的主題別以外の科目の多くは共通時間割制度の導入より、受講者制限や並列開講による受講者の調整により受講者数の適正化が図られていると。全体的に、次のページにアンケート出ておりますけれども、ほぼ満足しているのではないかと。しかし目的主題別科目の一部では受講者の過度の偏差や過密化が指摘されていると。これは後でまた出されるかと思っておりますけれども、非常に学生数が多くなって一つの教室にあふれ出るという部分が一部出されているということだと思います。そういうことで大体としては満足されているのではないかというふうに考えておると。

それから2番目の方の学生が希望どおりの授業科目を受講出来たかについてのアンケート結果は次のページに示されております。次の19ページのアンケート結果に出されております。それでその結果を見ると時間割は学生数の授業選択の自由度を十分保証していると、大体非常に満足しているということからして保証しているのではないかというふうに考えられると、そういう結果になっております。これはこの部分については先生方のアンケート結果はなくて、学生さんの方の結果だけになっていると。次の学期の区分と授業時間ということについても、

これも先生方のアンケートではなくて学生さんのアンケートの結果です。厳密には2学期制になっておりますんですけども、2学期制に関してはアンケートに含まれてないため本当のところは分かりませんが、そこに書いてありますように1学期制を半分にした1単位科目の開設、それから両学期開講についてのアンケート結果が表5に示されております。そこに学生さんの方のアンケート結果に満足と総体的に満足ということを加味すると、490の710ですから相当な高い割合で肯定していると。不満とする学生さんの割合は非常に少なくなっているということが分かると思います。そういう意味では1単位科目の開設とか両学期開講についての受け止め方というのは非常に良好になっているというふうに考えられます。

次が次のページに授業時間に対するアンケート結果ですけども、そこに満足しているという表6の結果ですけども、それぞれ満足と総体的な満足をやりますと、約86ぐらいですので半分まではいかないですけども、かなりの割合になっているというのが分かります。それは各学部ともそんなに大きな変化はないんですけども、そのぐらいの割合になっていると思います。それに対して授業時間に対して不平というか不満というか、そういうものも一定の割合で出されております。不満の割合の中で大体その82の65とか24の24、150の177というふうに割合不満というのが出されております。それでその不満の理由はということが表の7に結果として出されております。1コマの時間が非常に長いというのと、休憩時間が短いと、それから昼休みが短いと、そういうのが、それとそこにちょっと出ておりますけれども、16時で終了すべきと。全員がかなりではないんですけども、不満としてはそんなところが比較的多く出されております。

それでこれをどう読むかというのはいろいろ考えられるところなんですけれども、その私の21ページのところに、評価というところに記入されておりますけども、先生方のアンケート結果というのはしておりませんので分からないんですけども、かなりの割合が満足と総体的に満足を入れますとある一定に割合をされているということはかなりの方が肯定されているというふうに思われますけれども、そういう不満の方もかなりあるということですので、これは単に授業時間でなくてですね、授業の進め方とかあるいはそういう問題、あるいは学生のどの程度授業に参加しているのかという問題も単純に授業の不平不満というのは単純ではないわけですけども、そういう進め方とも関連しているのではないかというふうに私自身は考えております。それで休憩時間との関連では、今後進め方を含めて多少そのへんを今後さらに検討をしていく必要があるのではないかというふうに考えております。

以上が私共の学部で担当した部分で、私自身の意見も多少入れさせております。以上です。

ありがとうございました。

それでは2件の基調報告をいただきましたが、それぞれ内容が異なっておりまして、まず最初の基調報告であります教養基礎教育の実施体制につきましての基調講演につきましてディスカッション行ってまいりたいと思います。何か質問あるいはコメントなどございましたら積極的にお願いいたします。

ございませんでしょうか。どうぞ。

工学資源学部電気電子の佐々木です。少しお願いとそれから教えていただきたいことを含めてお話ししたいと思います。

まず実施組織の組織表がございましたね。9ページに組織表がございますけれども、ここで私よく分からないことがありますので教えて下さい。まず真ん中、左の方に教養基礎教育調査

研究委員会というのがありましてですね、その中にその任務の中に広報、それから調査研究、FDというふうにあるわけです。まず私が言葉遣いであまりよく分からないのにFDという言葉があるんですが、私は勝手に教育改善活動というふうに呼んでいます、それでよろしいものでしょうかということですね。それからもう1つはですね、この調査研究委員会のこの調査研究及びFDという活動とですね、それからその組織表の下の方に部会というのがあるわけですね。この部会の方で自己点検評価というふうな作業が2つの、両方共の組織の方に書き込まれているわけですが、これらの上の方の調査研究委員会と下の方の自己点検評価との関連相互とはどうなっているのかということをお教えいただけないかと思いますが、よろしく願います。

今の佐々木先生からの最初のご質問のFDの方は教育改善活動ということでよいと思いますけれども、調査研究委員会と下の教養教育実施部会及び基礎教育実施部会との関連ですけれども、これは点線をたどっていただければお分かりになると思うんですけれども、調査研究委員会とはつながっておりません、直接的には。この2つの部会はあくまでも教養基礎教育運営委員会の内部における部会として、現実的には連動して動くことはあるかもしれませんが、組織的には運営委員会の方に属している部会です。説明はそれでよろしいでしょうか。

秋田大学というふうに書かれているわけなんです。そしてみますと、この実施主体は誰なんだろうということをお教えいただきたいわけなんです。もう1つ補いますと、全学の自己評価委員会というのはこの自己評価とどういうふうに関係するか、そのあたり教えていただきたいと思います。全学の自己評価委員会と自己評価点検評価ですね、この教養基礎教育の実施体制ですと、部会が行うあるいはその一つ上の教養基礎教育運営委員会が行うとなっているわけですね。ところが記述の中に、この調査におきましては調査研究委員会が非常に大事な役割を果たしたとそういう記述があるわけなんです、これはどういうふうになっているんだろうかということが一つと、もう一つは全学の自己評価委員会ってこれどうなっていましたかということなんです。

私が知っている範囲の限りでお答えさせていただきますけれども、足りないところは主管の方で補っていただきたいと思いますが、この教養基礎教育運営委員会あるいは調査研究委員会と全学の自己評価委員会との関係ですけれども、あくまでも全学の自己評価委員会が主体というか、大きな実施部隊でそこでその都度一応審議了解を得ながら運営委員会のメンバー及び調査研究委員会のメンバーで自己評価を行ってきたという経緯です。私が知っている限りにおいては、そういった形で展開されております。

まず最初の全学の自己評価委員会との絡みですが、この報告書は秋田大学の自己評価委員会の名前で出されます。実際のこの記述に関しては自己評価委員会の下に置かれました専門委員会、これが実動部隊となりまして、その中で特に教養基礎教育に関しては運営委員会と調査研究委員会のメンバーが小委員会、部会を設けまして、これが実際の作業をしたということになります。関連はそういうことです。それからそれぞれの運営委員会、調査研究委員会等に任務として課せられております自己点検評価ですが、これはいずれにしてもその教養基礎教育は毎年自己点検を行うと。その結果を踏まえて4年の期間をおいて改善充実のための見直しを行うということですから、少なくとも運営委員会なり下の部会に関しましては、毎年毎年点検評価

を行うというのを重要な任務としているわけです。一方、調査研究委員会の方の任務の中の点検評価ですけれども、これは運営委員会とは相対的に独立していて、秋田大学の教員以外に外部からの研究員なり調査員を加えて点検評価に当たる場合も有り得るという、そういう独立性の高い委員会として設定しておりますので、同じ自己点検評価といっても運営委員会と調査研究委員会の職務内容は質的に違うということだろうと思います。

それでは他にございませんでしょうか。

医学部の増田ですけれども、こういうふうにとまとめられてそれから説明を聞いてかなり分かったんですが、非常によく分かって、財政のことなんかも分かったんですが、実際にはほとんどの人がここまでいろいろなことをやらないと分からないもんですよね。実際のところ、こういう実施体制がどのくらいの教官に分かっているか、それから学生の方は分かんないでしょうけど、そのあたりはどのくらいの予想をされているんでしょうか。

それでは私の方からでよろしいですか。常にこういうことを言うんじゃないと思うんですけれども、平成8年から始まりました教育改革、足掛け3年かけて平成10年から実施しているわけですが、この実施体制につきましては、その都度これは4、5回にわたって体制構築のために修正が行われましたが、最終的にこういう形になったわけですね。これは教授会にも諮られております。そして平成10年の3月には改革資料集ということで教員のメンバー全員に配布されてこの中にもこの組織が載っているわけです。ただしこれは熱くなるのは早いけれども、冷めるのも早いということの典型的な例かもしれませんが、こういう組織を念頭において委員会のメンバーになっておいていただかなければ困るわけですけれども、時にやはり一体この委員会はどういう任務の委員会であったかという疑問をもたれる先生もないわけではない。全学的に言いますと、例えば学長の下に全学教育委員会というのがありますが、これは平成10年、11年と実際には委員会開催されておられません。そういう状況が長く続くとこういう委員会があること自体が忘れ去られるようなことがあるかもしれませんが、そのためにはこのワークショップもその機会なんですけれども、教養基礎教育の様々な問題についてその都度実情を認識していただいて改善改革のための手立てを提案してもらうような、そういう機会を設けて意識を深めてもらうという、認識を深めてもらうということが必要だろうと思います。ただし何もしないでただその認識を深めろ、高めろということも何ですので、やはり一つは新しく採用されて教養基礎教育を担当されるような可能性のある先生方を含めて広報活動が必要だろうなと思っているんですけれども。

関連していると思いますので、うちの学部の事情をちょっとお話ししたいと思います。教養基礎教育を含めましてですね、うちの学部では例えば学科単位で外部評価を行ったり、あるいは学部の教養基礎委員会等ではそれぞれの委員に事情をお話ししたりしております。現在の教育に対する評価というものをどういふふうなフィードバックして各教官に知らしめるかということに意を尽くしております。今年もですね、これは学部全部の学科に対して、機械工学科を除く、機械工学科は昨年度外部評価を行いましたので、機械工学科を除く他の学科に対して外部評価を行うと。その過程において教養基礎教育に関する今までの調査委員会等でやった、このデータというものも多分資料として出ていくと思います。そういう過程を踏まえまして、各教官に意識を新たにさせるということが、機会が出来てくると考えております。先ほど主管

からもお話しありましたが、広報活動あるいは今日のようなフォーラムというようなものを通してなるべく多くの先生方にその実情というのを知ってもらって、教育というものがどういう形で実施されなければならないかという意識を高めてもらいたいということに努力することが筋だろうというふうに思います。なかなか初めてその資料を見ますと、どういうことなのかということがなかなかつかめないとありますけれども、こういう機会を通して意識を新たにしていくというのが必要なんじゃないかというふうに思います。関連ということでお答えしました。

ありがとうございました。ただ今は工学資源学部の組織に対する理解度とそれから広報というようなことのお話だったかと思いますが、こんなことを聞くのも何ですが、教育文化学部の方ではかなり意識が高いものと思われまますけれども、どなたかご意見いただけませんかでしょうか。

それでは私の方から簡単に答えさせていただきますが、もし教育文化学部の先生方で付け加えること、あるいは間違い等ございましたら訂正して下さい。

先ほどちょっと指導体制、実施体制のところでも申し上げましたけれども、これまでの経緯から言うと教育学部あるいは教育文化学部は一般教育あるいは総合基礎教育に実質的に担ってきたというか、かなりかかわる度合いが高かったわけですので、ある意味では現実的な活動としてかなり浸透しているだろうと思います。ただ今回の教養基礎教育の改革において実施組織が全学に移ったということ、そしてそれを支える学部の委員会があるということに対する認識といますか、そういったものはこちらの広報もしているとは思いますが、必ずしもすべての教官がもっていらっしゃると思えない部分があります。やはり全学の運営委員会とそして学部の教養基礎教育委員会がどういう形になっているのか、あるいはいろんな問題が生じたときにどういう形でその問題を持っていけばいいのかということに対してまだ隅々まで認識が行き届いているというわけではないような気がします。しかしこれまでの教養基礎教育といますか、一般教育に対するかかわりがありますので、現実の授業運営とかあるいはカリキュラムの問題に対してはきちんとした意識をもっていらっしゃる先生方はかなり多くいらっしゃると思います。私の方からはこれで。

ありがとうございました。各学部とも教官の意識を高めるということでは一致した方向であろうかと思えます。

それでは多少時間が進んでまいりましたので、2件目の基調報告につきましてご討議賜りたいと思います。カリキュラムの編成についての基調報告でございます。どうぞ。

工学資源学部の吉村ですが、実は先週国立大学のですね、新制大学の工学部長会議が開かれまして、その時のいわゆる協議事項に補習教育についてということが挙げられました。ちょっと4時から学部の会議がございますので、途中で退席しますんでこの場がいいかどうかかわかりませんが、それで各大学でですね、いくつかの大学が実は専門高校から入学してくる学生に補習授業をしているという、いろんな事例が実は出ておりまして、一番古い歴史は新潟大学の工学部が一番いい長い歴史をもっているわけですが。隣の山形大学も今年度から始めたという話がありました。新しい平成10年度からの教養基礎の中で入門物理学と入門化学という科目が出来てございますんで、そういう意味では物理と化学については比較的安心しているんですが、

英語についても可能であれば能力別のクラス編成というのが出来ないのかどうか。他の学部と違って来年度から470人、落ちますが一応大変大きな入学定員持っておりますし、学生の出来不出来に相当なバラツキがございますので、今のように学科毎にですね、例えば英語出来のいいのも悪いのも同じクラスで教えるということが果たしていいかどうかですね、それを是非検討していただきたいというのが今日の提案でございます。

ただ今補習授業に関連いたしまして、英語を能力別のカリキュラムを検討していただきたいという提案でしたが、この件につきまして何かご意見などございましたら。

先々週、東北地区の国立大学の教養教育の研究会がございまして、その折のテーマが教養教育における外国語教育の問題点ということで各大学ともにいろんな悩みを持っていることが紹介されました。その中で外国語教科について能力別編成のシステムの導入でありますとか、その他個別の大学のいろんな手立ての報告があったんですが、実際にやろうとなるといろんな問題が生ずる。一部で施行している大学もあるんですけども、さらにこれ99の国立大学含めて考えますと、実際にこれはお茶の水女子大とか、関東の大学で能力別編成をしているところも増えてきているという報告もございました。ただこの場合に一つ問題になりますのが、入学試験の折に、入試センター試験受けておるわけですね。さらにその入学試験を経た上で能力別編成をするということになると能力判定のための試験のようなものを2次的にまたやらざるをえないという形になるという、そこが一つジレンマになるのではないかなという意見も出されていまして。いずれにしてもこの件に関しては各学部でいろんな問題、今先生がおっしゃられたような問題もありますので、現在特別の外国語の小委員会というのを設けておりますので、今の提案を受けまして調査研究委員会なり運営委員会なり実際に検討してみたいと思います。

ありがとうございました。どうぞ。

今工学資源学部長から大変大事な提案がなされたと思います。少し私からもご意見述べさせていただきますと思います。実は学部長はあまり心配しておられないと言うんですが、入門物理というのもですね、どの程度機能しているかというのもやはりそれなりに点検する必要があるということをお私に感じております。例えば私自身が自分のクラスについて調べたところによりますと、授業はこれまで学んだ知識を出発点として理解可能なレベルであるということについて5段階の評価をアンケート実施しているんです。そうするとこれで磁気学の授業なんですが、高校で習わなかった学生の86%が無理だと答えています。高校で習った諸君は約50数%も、やはりこれも無理だと答えています。しかしながらとにもかくにも80%以上がやはり無理と答えた現実があるわけなので、実を言いますと語学だけではない非常に深刻な問題だと私は思っています。それじゃあ、能力別クラスを考える上に何が必要かといいますと、やはりこれは教育理念の問題、教育目標の問題、それから教育方法の問題、教育評価の問題、これら総合的に考えた上の教育システム全体の大きな問題としてですね、様々な調査研究だとかあるいは世論関係だとか、そういうようなことの上で初めてそれは実現の方向性が見えてくるものではないかと思っております。ですから大変大事なご提案だと思いますので、今後それこそ調査研究委員会の方でもご検討いただけないかというふうに思います。

大変重要なコメントありがとうございました。ただ今入門物理学に関連いたしまして総合的

な検討が必要である、そういうようなお話しでございました。

今以外に2件目の基調報告についてご質問などございましたらよろしくお願いたします。

評価ということですから、評価に関連してですが、クラス規模の問題について、例えば非常に多くの学生を扱ってなさっている先生がもしこの会場におられましたら、その先生がどういう問題、現状にあるかお聞きしたいんですけれども。いかがでしょうか。おられますでしょうか。

これは科目に特定しませんけれども。

教育文化学部の寺井でございます。秋田の農前後期A Bで開講しておるんですが、今年の例で申し上げますと300人弱ということで教室を2回ほど変更しなくちゃいけなかったということがあるんですが、確かに人数が多いということもあって授業全体が成り立たなくなってしまうといえますか、つまり私の側から授業を展開する際にも確かにしんどいこともしんどいんですけれども、学生の側が私に向かって授業に集中する場合に300分の1になるっていうわけではもちろんないんですけれども、非常にそういうふうな集中の程度が低くなるっていういいますか、そういう感じ、印象を受けまして、授業が成り立たないっていうのがあります。あとそのために内容をもちろん変えたり工夫などしたりして集中できるようにしなくてはいけないというのはあるんですが、もう一つ評価の部分で非常に掌握しきれない部分があります。それは少人数であればいろいろと学生との対話も通したりなどして、授業も成り立ちますが、300ともなりますと全くそれが成り立たないものですから。私は去年は100人前後だったものですから、急にこんな増えてしまったもんですから、全くそれを予想していなかったということから授業の進め方であるとか評価の部分についても、それから内容の系統性であるとかいろいろなことについても工夫する余裕がなくてですね、来期になってからそのへんの工夫したいと思っています。いずれにしても非常に分かりやす過ぎますと全く授業は成り立たないといえますか、小学生相手にしてワアワア言ってそういうふうになり立たないっていう、そういうことではないんですけれどもね、基本的には授業自体がきっちりしたものにならないという反省があります。その点で少し多いというのなら多いでそれなりに工夫した形で進めたいと思いますけれども、基本的にはもう少し多い少ないのへん、少しバラしていただければ、何か工夫がないのかなというふうに。姑息に時間を少し変えたりして、なるべくこうそういう時間が集中しているところに来年当たり入れようかなと思っていますけれども。そういう形でなくて何か工夫できないのかなというふうな希望を思っています。突然だったものですから特に整理もしないで話しました。

ただ今300名程度の授業で非常に対応に苦慮するというので、多少矯正が必要なのではないかというお話がございました。どうぞ。

教育文化学部の西江です。私が担当している目的主題別科目の中にヨーロッパ文化と音楽というのがありまして、昨年度1期の方は全く問題なかったんですけれども、2期の方で教室の収容人数が99のところ110人ぐらい最初いまして、その教室ちょっと変われなかったといえますか、ちょっと音楽も聴かせないといけないという条件もありましたんで、一番最初どうしようかなと迷ったんですけれども、いちいち出席はとってられないだろうと。そしてこの授業は一応評価というのはレポートによって決めるという形でアナウンスしましたけども、そうするとその次からかなり減ってしまったわけですね。そういった意味で最終的にその教室の規模と受講者数は一応形を整えることができたんですが、今年はそういう事態が生じた場合はど

うしようとちょっと今考えていまして、もし99で教室を変わるんなら変わってもいいんですが、講義の内容が内容ですので、やはり出来たら本当は50人ぐらいが一番いいわけです。ただ教室規模までは受け入れないといけない。じゃその時どうするか、もし多い場合抽選にしてみようと、これは実際に本当にその授業を受けようという意志がある学生と、一応1期で落としたがために2期で何でもいからという学生が一緒のレベルでふるい落とされたり、あるいは入ったりするわけですね。これもやはり避けたい。もし今そういう事態が出たら考えてるのは、一番最初に授業をとった理由をきちんとかなり時間をかけて書かせて、これはもしかしたらこちらの独断の選考になるかもしれませんけれども、それによって決めさせてもらうという形しかとれないんじゃないかというふうに思います。やはりさっきの寺井先生のように300人の人数を抱えているというのは非常にやりにくい。学生がそれだけでも騒がしくなりますし、そういった形での1つのクラスに多くの人間が集中するという形はなかなか全面的に解消することは出来ないと思いますけれども、これから先考えていかなければいけない問題だろうなと思っております。以上です。

ありがとうございました。他にございませんでしょうか。

教室の規模については88ページと87ページに一応前期に出席したクラス編成ということで、大規模編成ということで、大規模クラスということで書いてあります。これを参考にしてくれればいいと思うんですが。放棄が、一番最後の方に放棄というのが書いてありますが、放棄が多いクラス名が人数が多いところでは法規も多いと。教育文化学部で非常に主導的なそういう科目と工学資源学部が大きく入ってきている科目とそういうふうにありますので。秋田の農というのはAとBとあって、137, 149でいいんですか。…… Bはまだですか。

こういった大規模授業に関しまして何か改善の方法と申しますか、そういった調整につきまして何か検討なされているものでしょうか。

いろいろありがとうございます。今お話を伺って感じることもありますが、実際いろいろ以前伺った事例など勘案しますと、一つは教養基礎教育の改革の折に念頭におきましたのは1クラスのクラスサイズを語学や体育を除いて平均して100人前後をメドにしようと。少なくとも250を超えるような授業はなくしましょうという議論があったわけです。一方でその議論の中では、これは教授方法の問題が残りますけれども、双方向ではない一方的な授業形態になってしまいますが、多人数教育も単にマイナス面があるばかりではないだろうということも議論されました。これは昨年分につきまして、大好先生がまとめていただいたクラスサイズとそれから教室の使用頻度を重ね合わせたグラフです。これで見ますと平均して昨年度で320, 30の科目があったと思いますが、平均すると99人から80人という、そういうクラスが多いということ。300を超えるものが1科目、200~219というのが3科目、140~150というのが7コマぐらい。で、今年度の前期見てみますと、この傾向がまた変わっているんですね。それが何故なのかはよくつかめません。鬼と仏があるかもしれませんし、いろんな問題が絡んでいるだろうと思います。そういう意味では私個人もそうなんですけれども、個別の授業で昨年と比べて受講者が急増したとか急減したという事例が結構あってそれが何なのかというのを実際に調査する必要もあるんじゃないかというふうな気がしております。当然これは成績評価の問題にも絡むでしょうし、授業中に学生に対して私語をするなとしつこく言う先生とそうでない先生、いろ

んな要因が考えられます。しかし、いずれにしてもこの問題が先ほど寺井先生がお話されたような大きな問題を生んでいることも確かですから、これはどこでやるかは別問題として実施運営上のかなり大きな問題として検討していかなければ、緊急にですね、ならない問題だろうと認識しております。逆にそのような実際の問題点をお一人で抱えるんじゃない形で率直に話し合える、あるいは対策を考え得るような態勢を作りたいと思っているんですけども、今のところはそういうことしか言えないんですが。

ありがとうございました。それでは緊急の検討をお願いいたしたいと思います。

他にこの大規模問題以外のカリキュラムの編成につきまして、ご質問ございませんでしょうか。

ちょっと関係から離れちゃうかもしれませんが、さっき20ページにありましたですね。授業時間に関する問題で、僕は大学生協の理事長をやっているものですから、学生からこの昼休みの時間とかそれからそれぞれの時間について学生理事の人に直接話を聞きますと、やはり生協としては利益というとおかしいですが、それを上げたいもんですから昼休み時間を少し長くしたいというところがあるわけで、1時から午後の授業を始めたら4時40分くらいに終わることになるということを提案に出しましたら、それは困ると。部活とかいろんなことでもって出来るだけ早く午後は締め切ってほしい、ということで現在の12時50分からの午後の授業の開始を10分間遅らせることは提案が否決されて、そのまま現在になっているということになってます。それから学生の授業時間90分授業で70分になったら大抵の学生がギブアップしてしまうという基本生活そのもののことにかかわることかもしれませんけれども、それが僕の授業時間に対する考え方の一つなんですけど、じゃ今度は朝今8時50分ではなくて、8時半から授業を始めたらもっと休み時間も取れるし昼時間も取れる。そしたら今度は職員の方からそんなに早く授業を始められたら大変なことになっちゃうという話が出ちゃいまして、どうすれば授業時間の取り方というのをすればいいのかということがまだ解決はしていませんけれども、この点について少し考えてほしいなという提案です。

ただ今、授業時間の取り方につきまして提案がございましたんですが。

これは休憩時間ですか、昼休み。これは今私だけでは何とも答えられないんですけども、これは全体の組み方とか授業の組み方とか、そういうものを含めて恐らく検討しなければいけないんだろうということで。これはちょっと、熊田先生こういうのはどこで取り上げるんですか、うちの方で取り上げるんですか。ちょっとこれはどこで取り上げるのかわからないんですけども。ただ、一応今私共のアンケートをやったということですね、現状にそういう授業時間の長いのと休憩時間が短い、学生がどの程度そういうものに対して認識というか、不平不満とかあるのかというのを調べて、それを取り上げて今後その点を、これ単純ではありませんので、大きな問題ですので、今後関連して、私もそういう意味でそこに関連として検討していく必要があるだろうということでしているんですけども、ただそれをどこで取り上げてどうしていくかというのは、ちょっと今の時点では分からないので今後の課題というか、そういうことでさせていただきたいと思っております。

これ熊田先生、何としたらいいんでしょうか。

結局これは教養基礎だけではなくて、3学部、全学部の問題になりますから。吉村先生、これは検討するとすれば学生部協議会ということなんでしょうね。授業時間の変更ということになりますと。

私もまだそのような議論を学生部協議会ですべきものなのかどうかということよく認識していないんですけれど、従来そういうふうになっているんですか。

これ要するに学則で変更になりますよね。授業時間定めておりますから。

ですからこれは簡単に変更はできない。議論はしなければならぬ事柄だろうとは思いますが、そのための素材にはこれなるわけですね、学生の一部にそういう不満を持っている一年生がいたということですから。ただ全体としてみますと、不満の度合いは低いというのがこのアンケート調査の結果だと思います。大半8割近い学生は現行でよいと。にもかかわらず、90分授業について行けない学生も多くなっているというのも確かだと思いますが。

授業時間帯の問題とそれから授業時間の長さについてはいろいろ今後さらに検討を深めていきたいと思います。

丁度時間が開始されて90分経ちまして、授業時間と同じ時間でございますが、まだ討議あると思いますけれども、最後の方でまた時間をまとめまして最初から意見交換を行いたいと思いますので、このへんで10分くらいコーヒブレイクといたしたいと思います。

10分経ちましたのでコーヒを飲みながらまた進行してまいりたいと思います。

先程の最初のご案内では3番目に増田先生の基調報告をいただく予定でございましたけれども、個別授業報告の中で今野先生がご都合で早めに終了したいということですので、この時間の中に今野先生の個別授業報告をしていただきたいと思います。

何かこちらの都合でご予定変更させて申し訳ありません。今までの話の流れもわからない中でお話ししますので、いろいろ失礼ありましたらお許し下さい。授業の報告ということで手短かにさせていただきます。何か誤植が大変多いのでちょっと申し訳ないというか、直していただきたい部分があるんですけど。心身障害学概説Bという授業のご紹介ということです。

心身障害概説Aというのが前期に工学とか工学資源の学生さんを中心に100人前後の授業があります。あと関連した内容としては学校教育課程の方たちを中心に心身障害論ということで前期に170人くらいの授業ですね、前期に同じような導入的な授業が心身障害論と心身障害概説Aがありまして、後期に心身障害学概説Bというのを開設しているわけです。これには心身障害の前期の授業でもう少し深めたいという方とかですね、そういう方が中心に来ております。目的とか授業の概要ということですね。障害のある方たちについて様々な障害の本体、この障害も実を言いますと障害児教育の中身、対象としての障害もあるんですけども、学生たちにとって身近でしかも誤解があるものとしてはむしろ癲癇とか色盲、色覚障害とか精神障害というのがあったりして、そういうことがお互い学生同士のいろんな問題が起きたり、相互支援の場合にも大切な問題ですからその内容も含めて考えております。そういう障害の本体とか、医療教育福祉現状ですね。

ま、共に生きるということによくノーマライゼーションとかバリアフリーというこというわ

けですが、それどういうことなのかとかどういう現状なのかとか紹介したり、障害ある方たちと係わりたい援助したいという気持ちもかなり今学生さん持っております。そういうことでのいろんな留意点とか、姿勢ですとかですね、そういう意味で欲張って多面的に学習するということです。そのことでいろんな障害のある方たちに対するいわゆる偏見とか、実は偏見以上に誤解、間違っているということをも誤解している部分が結構ある、間違っただけ知識を持っていることもありますのでそれを解消するとか、あと町でよく障害のある方たち見かけたりバスの中で見かけたりすることも前より機会としては多いんですけども、自然に声を掛けたり、とにかく目をそらさず見たりとかですね、そういうこともできるように自然な交流機会の増大を図るということです。友達の一人に障害のある人も一人加わってくればいいなあという気持ちも込めて授業を行っています。まあ、そういうことで自分についてとか、実は障害のある方たちについての学習だけじゃなくて、自分にとってあるいは障害のある人も含めていわゆる人間についての理解を深める一つの手立てにもなるんだよ、ということも含めて学生に伝えております。そういうことで授業の目的やっておるわけですね。

授業の実施後点検ということですが、受講生のほとんどはいろいろ係わった経験がないんですけども、実を言うと兄弟とか親御さんとか、お祖父さんお祖母さんとか親類とか友達にやっぱり障害のある方たちがいるわけです。自身もいつ障害を負うかもしれないということも現状なんですね。でも経験としてはないということになりますから、とにかくいろんな場面で障害のある方たち、子供も含めて、今どういう生活をしているのかとか、いわゆる共に生きるということを一一般の社会で言われる中で障害のある方たちがその実現に向けて実際にはいろんな苦勞をしているというところ、でもいろんな取り組みが始まっているんだというようなところも含めてですね、文化活動とか産業資本作りとか、そういうことを知ってもらいたいと思ひまして、いろんなところに行って私が取材したビデオ紹介したりしています。また講義に関するいろんなプリントもたくさん用意しまして、図や写真を豊富に入れてやっているわけです。養護学校の見学とかも実施しております。でいろいろ反省あるんですね。思いがけないことで、学生同士が手をつないで、彼と彼女がですね、えーって、今の学生の中にはそういう人もいるの、なんて現場からはびっくりされたりもするんですけど。行ってみないとそういう学生の状況も分かりませんから。ま、いろいろでも実施しております。あと私自身もいろんな障害のある子供さんたちとか学生さん、家族と一緒にいろんな地域的な活動、ボランティアというのかな、やっていますので、そういう経験も紹介したり一緒にボランティアとしていろんな経験やりたい人はいろんな場所紹介しますということで、実践的な場を投入しようとしております。ただやっぱり後期の概説Bに関しましても授業時間の中でですね、限られたコマ数の中で知識として伝えたいこともたくさんあるんですね。そういうことでなかなか学生からの質問とか意見を引き出すということが出来ない、そういう配慮が薄れがちであったということはやっぱり否めません。また去年はやっぱりいろんな障害体験をしたいとかっていう学生さんもあります。具体的に車椅子の操作をしたいとか手話を覚えたいとか点字を覚えたいという方もいるんですけども、去年はそこいらへんうまく時間を設けられなかったということあります。

で、自己評価としましては先程も言いましたけど、プリント作成したりビデオを使ったりしまして可能な限り準備をして授業に臨みました。繰り返しになりますけれども、具体的実践的な学習を導こうとしたということでもあります。この目的は感想とかアンケート等見ますと達成出来たと考えるわけですが、この授業の日にはですね、やはり他の講義、自分の専門も含めて全部で金曜日に3コマ入っているもんですから、本当は障害のある本人のお話を聞いたり、親御さんに来てもらって話を聞いたり、車椅子をたくさん借りて体験学習をさせたり、い

ろんな湯所も見学させたいんですけど、そのためのいろんなやりとりとか接待とか用具の運搬とか、個人的な負担がかなり大きくなってしまいうことがありますが。そういうことでなかなか去年は実現出来なかったということがあります。そういう意味での反省がありまして、後期の概説に関してはきっと30人くらいだと思うんですけども、やはりもっと実践的なものを入れていければなあということで。まあ車椅子も1台買って用意してもらいますし、借りれるツテも見つけました。あとやっぱり点字とか一、長くなってすみません、実際に体験してちょっと点字とか覚えるとそれだけでボランティアの一つになっていくんですね。いろんな現場に行かなくても座って授業の中でやれるボランティアもあるんだということで、いろいろ点字とかを教えて、それで自分で好きな詩を点字で打ったりして、それを全盲の方たちに贈るとか差し上げるとか。あるいは朗読のテープ、自分の好きな本とか小説とかをちょっとテープにとってもらってそれを30人分、例えば集めて実際に障害のある方たちに届けて聴いてもらってその感想を聞くとか、そういう形で消極的かもしれませんが、体験的なものとかボランティアの歩的なものを授業の中でやれるんだという見通しがちょっとつきましたので、これも前期の心身障害概説のAの方でちょっとやってみました。後期も枕説Bとして出来そうなので、そこらへん学生のニーズをいろいろ聞きながら、人数多い少ないにかかわらずいろいろ工夫出来るんだなというところ、見通し持つことが出来ましたので今後取り組んでいきたいと思っております。

ちょっとお話まとまらなくて申し訳ないんですけども、以上です。

ありがとうございました。実体験を授業の中に取り組むなど、非常に我々にとって貴重な授業報告であったかと思えます。先生のご都合によりまして質疑は割愛いたしまして、次にまた基調報告に戻りたいと思えます。

3番目の基調報告は医学部の増田先生にお願いしたいと思えます。よろしく願います。

医学部の増田です。81ページです。そしてそのレジメの方にはそれぞれの部分におけるまとめというところ、書いてあります。教育方法等ということで、シラパス、それから履修ガイダンス、クラス編成、成績評価、授業方法の工夫改善、授業評価というふうなものを医学部の方でやれということだったんですが、医学部の方はですね、非常に不慣れなものでして、どういうふうにしたらいいのかわからなくて、一応こういう形になりました。

まずシラパスですが、シラパスのポイントとしてはですね、これがちゃんと使われているかどうかということが主眼です。そして最初の方に書いてあるのはシラパスがどういうふうに来たかと、それからデータベースに入っているんですよということです。そして82ページの方はですね、シラパスの書き方と、こういうものでいいのかどうかというふうな形、一応なぞって見たということです。そして平成11年度にはデータベース化しているということで、ただオフィスアワーが加わったということです。点検としてはですね、これが本当にシラパス、要するに授業を受ける元ですから、今までおっしゃられたいろんな方がお話をされたと同じことですね、履修方法がうまくいくかというようなことですね。そのポイントに関して点検ということで履修方法の難しさ、時間割と人数制限により受たい科目を受けられない、授業選択決定までに時間が短すぎる、履修方法の難しさ、時間割と人数制限……あ、これ重複していますね、ということです。そして特にシラパスの内容と現実の授業内容の不一致ということが指摘されまして、これは教官の方にも問題がありまして、不一致の場合はありますのでそれは仕方ないかと、改善しなくちゃいけないというふうなことです。そして実際どのくらい利用してい

るかということで、特に学生のアンケート、次の83ページですが、いずれも高い利用率を示しています。結局もう我々はシラバスなしではどうも授業も何も出来なくなってしまうということですので、実際には非常に役に立っていますし、役に立たなくてはいけない。ですから使いやすいものにしないではいけないというふうなことです。

それからですね、84ページの具体的な改善の方法ということで、こういうふうなアンケートが出ています。要するにこの中では特に問題になっているのは概要記述の詳細化ということで、要するにどんな授業をするのかということ結構細かくちゃんと教えてほしいというふうなことだそうです。まあ、その他のことは大体比較的よくなってきたんじゃないかと思います。それから教官例のアンケートで85ページですが、一番上の方の表ですが、計画通り行われた授業は約70%と。工学資源学部や医学部ではオムニバスの方法の授業が多くて変更するということが難しいというか、そういうことを教えていないということです。個々の単位の教官でやられる場合にはそういう変更がある場合もあるということです。シラバスに関しては非常に肯定的な評価ということでございます。

履修ガイダンスですが86ページですね、次の履修ガイダンスに入ります。履修ガイダンスに関しては要するにシラバスを上手に使うためのガイダンスというふうな感じに僕はとったんですが、全体授業どういうふうにするかというようなことが書いてありまして、案内ということが書いてあります。もう一つ履修ガイダンスと一緒にですね、パンフレットみたいなものが一緒にきてまして、そこにもこういう企画室が出来たんだというようなことが書いてありますが、この履修ガイダンスの中に教務企画室の電話番号というんですか、非常に簡単な場所が書いてあるんですが、連絡するものが書いてないところがちょっと疑問だったんです。これはその時にその別のパンフレットに書いてあったのでよかったかなと思ってここには書いてありませんが、履修ガイダンスにはそういうものは入れておくべきではないかなと思っています。

それから学生課教務企画室の設置ということで、こういうふうになってきたということです。この時に教務企画室の利用経験というところでこれは学生のアンケートなんですが、医学部が非常に利用しておりますが工学資源学部と教育文化学部は比較利用が少ないんです。これは医学部に関してはそこしか行く場所がないので十分に利用しているんだと思うんですが、教育文化学部と工学資源学部に関しては他にもセンターがあるのでそこを利用しているのではないかなと思いました。それから満足度ということで、ほぼ満足しているということです。

87ページの真ん中では今度はクラス編成ですが、クラス編成はさっきから何度も問題になっておりますが、適正なクラス編成はどうかというふうなことです。そうしてそれで大規模クラスということがこんなものでありましたよということで挙げております。さっきも言いましたのであれですが、こういう状況です。例えば88ページの上の8、9と秋田の農A Bとなりますと、特にAの方で工学資源学部がどっと来て、Bの方で教育文化学部がどっと来ていると。こんなふうな感じのすごく人間の動きというのが今度の多人数教室になっていったりしたのではないかなと思いますが、バランスが悪いことは悪いです。こういう状況です。下の方の31の方からはですね、スポーツ論とか、そういうものは結局これは必ず取らなければいけない授業なので、こういうふうにしかりとした人間の数になりまして、放棄というの也非常に少ないという感じになっております。これは必須の授業になっているのでこうなっていると思います。

89ページの下の方の小規模クラスというところでは、大規模クラスとあれば小規模クラスの問題かなあとこのように記載しております。この90ページの方に一応説明をつけておりますが、いずれにしてもこういう授業もあって、これぐらいになってしまうんだというようなこともあります。ただ国際言語科目でドイツ語、ロシア語それから中国語と、そういうようなところに

関してはこれは必然的にそうになってしまうだろうということです。それから上級日本語と、こういうものも外国人が受ける訳ですから、そういうところでこういうふうにならぬ教室になっていくということです。

90ページの方の下の方の点検というところに、教官に対する適正な受講者数のアンケートというものがあまして、これは初年次ゼミがどれくらいどれくらいというようなことが書いてありまして、およそ31から60名が適当というふうな感じで考えておられます。でも英語と非英語というか、外国語に関してはさらにそれよりも少ない方がいいだろうというふうな回答でございます。それからどのぐらいの数でいけば本当にいいだろうなというふうに考えておりますが、適正な数は確かにこのようにアンケートにあるような数じゃないかなと思っております。

91ページの方で今度は成績評価ですが、成績評価に関して基本的なことはワークショップとかそういうようなものでもかなり述べられたんですが、現実にはどういうふうになっているのかということを書いてあります。初年次ゼミでは多くの場合はAだと、目的主題別科目ではいろいろな筆記試験、レポート提出、小論文が主であると。多くの場合は出席を考慮していると。結局オムニバスの場合にはどういうふうに評価していいのかということはまだ決まっておりませんが、「人類と感染症」なんかでは大体みんなBにしまったというふうなことがあります。国際言語科科目に関しては次の92ページですが、これはきちっとした学生が決まってしまうので、比較的正規分布に近いような成績が出てくるんじゃないかと思うんですが、そういうふうになっております。スポーツ科学に関してはそういうふうに評価が90%がAでした。基礎教育科目に関してはレポート、試験、出席なんかを組み合わせます。情報処理においては99%がAになっているということがあります。93ページの教官へのアンケートでは、1回の試験、複数回の試験、1回のレポートというふうなことで評価しているということです。学生への通知に関してはシラバスと授業の最初の両方で通知するべきであるが、アンケートでもそういうふうになっているということです。

94ページでは学生の成績というところでこういうふうな成績の評価ですね。相対的によい、相対的に悪いとそのあたりが多くなっています。成績評価に関する学生の不満ということでは、これは不満に対応するということです。でちょっと言い忘れたんですが学生へのアンケート、95ページが学生へのアンケートですが、ま、こういうふうな感じで出席を取って欲しいというようなことがあるんですが、出席を取るということは何か矛盾しているような感じがあまして、出席をどうして評価に入れるんだろうというようなことがありますので、そういうことを私はこの文章で少し書いてありますが。まあ、評価の基準というのがなかなか難しいということです。もう一つは学生の不満としては、その評価するのがどういうふうに評価してくれたのか分からないというのがあると思います。従ってよく出席していると評価上がって欲しいという感じになっているようです。

まとめではこういうふうにワークショップで行われまして、いろんなことがディスカッションされたということです。グレイドポイントアベレージというようなこともワークショップでは話されました。で、96ページの上の方ですが、今回のアンケートは後期試験の際に行われたため、成績評価については関連する前期の科目の結果に対する学生の反応を見ざるを得なかったと。成績評価は各担当教官が責任を持って行うものであり、評価の基準が不明確などの学生の不満は基本的にはそれぞれの授業の中で解消していくべきであろう。しかしながら成績評価方法が不公平という不満を無くしていくためには、科目群の中で客観的な方法を追求していくことが望まれると。現在の成績評価は個々の教官が独自の判断により授業の到達目標に即した

達成度評価を行っているというのが一般的である。各科目の授業目標に照らして学生の学習充実度がより総合的かつ適正に図れる成績評価方法を確立していくことが必要である。これはこういうことなんです、このことはとても難しいなという感じをもっております。

96ページの5番ですが、授業方法の工夫改善ということでありまして。その中で教官のアンケートの中で、そういう項目に関係した項目を探しまして、そうすると出欠の点検ということで出欠をとるかどうかという、教官へのアンケートですね。教育文化学部と工学資源学部ではかなり出欠をとっていますが、医学部ではほとんど出欠をとっていないと。結局医学部に関しては医学部の授業ではなくて、そのオムニバスの方式の最後の授業というようなことで、その時にアンケートをとりまして、アンケートの中で出席していましたかということを書いた、そういうアンケートなんです。それは出席しましたということを書けば出席になりまして、ちょっと何かこのあたりも難しいということ。授業に関しての工夫ですが、まあこういうふうなものを使っていると、いずれもほとんどが使っていますと。授業の公開に関してはほとんどの先生方が公開が可ということですね。で、授業の改善ということですが、やはりワークショップなんかでそういうこと話しています。以上ですね。

98ページですが、授業評価と。授業評価には教官側と学生側のものがありまして、これが教官のアンケートで初年次ゼミに関して有効かどうかという表です。有効が多いですね。目的主題別科目としても同じことです。医学部では有効とするのが多いのですが、教育文化学部と工学資源学部では変化なしというのが一番多いです。学生アンケートは授業評価と関連するものとして、教養基礎教育の目的と実際の整合性、この質問の意味がちょっと分からないのですが、目的があってそれと合っているかどうかということ。大体合っているんだというふうな結果です。3, 4ですね。これは不整合だという人に聞いたもので、その次の100ページですが、受講科目数の制約、科目相互間の体系的関連性の欠如、教育内容に沿った内容の授業の少なさと、こういうふうなものが指摘されております。その下、問い12は授業への出席率ですが、出席率はこういうふうなものになっておりまして、9割以上出席したものが41%、このぐらい、こういうふうな。ま、結構出席しているということですね。授業に対する積極性ということに関しては、積極的な学生は比較的少ないです。60~70%の学生が消極的です。まあ学生側の問題もあるんでしょうが、授業そのものが積極的に受けてもつまらんというふうなことがあるかもしれませんので、教官の側にも責任があるんじゃないかなと思います。101ページの間14で試験やレポートの他に学業に対する取り組みということでは勉強したというのが結構少なく、やはり結構勉強しないんじゃないかなと思います。問22が学生の授業に対する不満の根拠と改善の方法ということで、これが一番不満がよくわかるという表なんです、授業目標の明確化が一番多いんだと。授業内容のレベルの改善、授業内容の改善、いずれにしても内容の問題が学生が指摘しているということですね。

まあ、103ページでも総括になりますが基本的にすべて肯定的な結果なんです、一番大きな問題はシラバスと本当の授業の矛盾というか、そういうようなことの授業内容のことに関してのことが一番強かったんじゃないかなと、全部のこういうことを一応点検してまいりまして、そう思いました。ですから、そうすると教官側の問題が大きいかなと。学生の方にも問題があるようですが、学生の方に何と言っても変わるわけではないかもしれませんが、こちらの方が変わった方がよさそうだなとそういうふうに思いました。以上です。

ありがとうございました。

それではここで司会を三浦先生に引き継ぎたいと思います。

非常に切れ目がよくないところですが、加賀谷先生がご発表を控えているということで、ここでちょっと交替したいと思います。続けて教育文化学部の中村先生からご報告をお願いします。

本日は報告書を読むというそういう題で、とにかく話をさせていただくということで、改めて2の教育内容について読んだんですけども、これは自分で2月3月の段階で書いている時には結構苦勞して書いたつもりだったんですけども、やはり読んでみると意外に内容が薄いというか、それは多少数字を元にして成果を組み立てていくということの若干限界かなと、そういうことも感じました。そこで今日の私の教育内容についての評価ですが、割と問題点をかなりちょっと肥大に出しています。つまり数字の点だけを評価しますと、例えば満足度に関して大体60%を超えていると。やはりこれは80%を超えるというのは逆に異常なことであるというふうに考えていますから、大体いろんな選択肢があって、割と60%の学生がよかったとか満足しているという評価を学生の方が下してくれるならば、私はこれは万々歳ではないかという言い方です。90%超えると逆に学生の選択肢というか、物を考える力がないんじゃないかというんで逆に不安になってしまうということですから、結果としては大体良好なんじゃないかと思いますが、その上で問題点を簡単に指摘させていただきます。

この教育内容ですけども4つの内容から構成されております。1つはこれは総合基礎教育から教養基礎教育へという、そういう概要についてこれは説明してある。これが最初の部分です。そういった改革に関して学生及び教官がどのように評価をしたのかということで、これは2番目が数字の分析です。それからページでいきますと37ページから教養基礎を担当していただいた先生方のご自分のシラバスに基づいて授業を行った結果、これどうであったか、あるいはシラバス通りに授業が出来たかということについて、担当していただいた先生方に答えていただきました。最後にそうした個別の先生方の自己評価をいただいた上で、どういう課題が残っているのか、どういうことを考えていけばよいのかというのが4番目になっております。私の今日のレジメの構成はこの個別の教官の自己評価に関してはそれぞれの先生のご報告に委ねるということにして、3つの形で構成させて……あと、その中でもですね、これは記述の面でも外国語に関しては三浦先生に執筆をお願いし、またそのスポーツ科学に関しては長沢先生に執筆をお願いしたという、そういう経緯で、主として私は初年次ゼミと目的主題別科目にその報告を限定させていただくという形をとらせていただきます。まず総合基礎教育から教養基礎教育へとその改革のねらいと概要に関して、これを読んだ限りにおいてどのようなことを感じたか、どのような問題点を改めて指摘したいかということです。そこでページ数でいきますと22ページになりますが、これはまず初年次ゼミ導入に関して5つのねらいが設定されております。そこで大体そのねらいがですね、これは高枚から大学への転換教育と。つまりこれは学生諸君に対して、これは生徒ではなくてやっぱり学生なんだと。ただアンケートでは自分のこと生徒というふうを書いてある学生がいますので、それをどうするかということ、問題として残りますけれども、転換教育ということ。それから教官と新入生とが緊密な関係を通して、そこで丁寧に指導をするということを通じて学生の問題意識を確立する、そして鮮明にする、そのための手助けをする。大体そういう内容にまとめられるかと思いますが、ただやはり一番大きな問題がですね、この2番目に書かれてある、つまり大学生活の必須の要件である報告書の作成を念頭に入れた発表討議できる能力の涵養と。そこがやはり初年次ゼミの報告なども読ませていただいた上で、これは私の経験からもやはり苦慮したところではないかと。ただこの2番目の課題というのは割と緊密に人間関係を作れば、指導すれば、やっぱり学生が積極的に取

り組んでくれるであろうというやや楽観的、無前提的な設定の仕方ではないかという、ちょっとこれは評論家的な言い方になりますけれども、そこではやはり初年次ゼミをどうするかということに関して、単に掛け声論とか理想論を言うだけではなくて具体的にどういう方法論が必要なのか、ということやはり詰める必要があるのではないかということ。次にこれは目的主題別科目に関してですが、これは従来の人文社会分野、学際分野というそういう整理からここで強調されているのはやはり複数の視点からと、複合的な視点ということがやはり強調されているというふうに思われます。ただこれもやや評論家的になりますけれども、ここから現代社会の諸相、地域社会論、例えば自然環境と地球と。どういう基準でこの区分わけをしたのかということがややあいまいではないかと。例えば地域社会の公害という問題ですね、そういう問題は例えばこれは現代社会の諸相でもありますし、また地域社会論でもありますし、自然環境と地球というそういう項目にも該当します。ですから、この項目をですね、やや無整理無媒介に羅列したという指摘もできるのではないかと。もちろんですからそれは積極的にとらえ返すということも可能です。例えばこれは地域社会論というのはかなり複合的な視点とか、複合的な方法論ということが求められるわけですがけれども、ただそれはある種きちんとした方法論を出さないで地域社会論、あるいは地域研究、その場合に例えばこれは地域という場合に割と学生は無前提的に自分が住んでいる身近な地方というふうに読み替えてしまう。でこれは地域科学課程の初年次ゼミの発表でもあったことですがけれども、地域科学に関するということになると大体報告のテーマが地域の祭りであるとか、夏祭り、冬景色、それから味噌、醤油、焼酎と、そういう話に限定されてしまう。そこで全く方法論の検証を経ないまま、何が証拠でということになる。そういうことも検証しないで、自分がとにかく住んでいる地域の意義を再確認すると。そういう話に学生の方がやっぱりとらえてしまうという危険性が多いと、これは科目設定あるいは授業内容にも一つの工夫が必要ではないかと。これはただ報告書を読んだという形での感想ということになります。ですから実態は違うんだという、担当された先生の反論は当然あるかと思えます。ただ読むということですから、読んだ限りでそういうふうに考えたということなのです。

次に改革に対する評価ということで、これは初年次ゼミの話ですけど、大体初年次ゼミに関して数字の上では好意的に受け止められたと。これは26ページであります。他の主題目的別に比べて、これは英語それから非英語、スポーツ科学の実技、それに対する満足度が高いと、満足した人が多いと。それと同等にですね、大体これは主題目的別の科目、現代社会の諸相からずっと見ていただくと分かるんですけども、満足したという学生数が100名前半に止まっている。それから満足したという回答を寄せた学生が237名おります。その意味では割と設定に効果があったというふうに判断することが出来るわけですがけれども。ただ不満を持った学生が何ゆえに不満をもったか、あるいはどの点で改善を求めるといった場合に、これは授業目的の明確化、それから学生の興味の喚起、説明方法等の工夫と、授業内容のレベルの改善と。かなりこれは不満の根拠としてはかなりシビアなことを言っていると、それをどうするかということがやはり問題になると思います。そこでこれは実際にこの学生ですね、個別の、何と申しますか、感想、それを26ページから27ページにかけてそれぞれの学部、あるいは専修、課程、学科というところで少しピックアップしてみました。そうすると大体これは満足したという学生の評価ですが、とにかくいろんな人の話が聞けた。そしてこれはいわゆる学校教育課程などを含めて現場について知ることが出来たという、そういうことで非常に満足したという印象を持った学生の意見が読み取れるかと思えます。それに対してゼミでよくなかったと思う点を挙げて下さいと。これは27ページから28ページのところですが、これは学生が自分の参加の

態度が積極的でなかったという、もちろんこれは自分自身の反省についても語られておりますけれども、これは教師の熱意が空回りしているとか、専門用語が難しくよく分からないとか、そういうこととか、それからやはりもっと丁寧に説明して欲しい、さらには何のためにこういうゼミが行われたのかよく分からないと。これは私の課程のところでも申し上げることですけれども、よかったということでご愛嬌だと思えるんですけども、27ページの最後のところに、一番上のところで地域科学課程の学生がこのゼミに関してよかったと、勉強しなくてもよかったと。これは悪くすると体系性がなかったという、これは批判にもなるわけです。そういうところから問題になるのではないかと。そこで次に教官側のサイドでありますけれども、この初年次ゼミの設定について、これ29ページにあります、これは学部によってかなりのバラつきがあります。これはご回答いただいた先生の人数少ないということもありますけれども、これは教育文化学部、そのゼミの開設そのものについて検討する必要があるのではないかと、これが13名の先生がそのような判断を表明されております。そこはやはり大体これは工学資源学部、医学部での初年次ゼミの設定というのが、やはり専門教育への動機づけということがやはりかなり重視されているのではないかと、というふうに私は読み取りました。でそれに対して教育文化学部、これは学校教育は若干専門教育への動機づけという色彩が強かったように読み取ったわけですが、ただこれはその他の第2課程、第3、第4、これは高校教育から大学教育への転換、あるいは大学で何を勉強するかという割と一般的な内容というところで、教官の側のとまどいもあるというところでそういう結果が出てきたかな、というふうに私は解釈いたしました。

次に目的主題別科目に関してですけれども、やはり相対的に肯定的な評価が出されております。ですからこれは冒頭申し上げたように、大体数字的にいくとこれ満足していい結果であると。これは繰り返しになりますけれども、90%以上なんて望むのはこれは却って学生が要求をする能力がないということで、まあこれはいい結果ではないかと思われそうですが、ただやはり不満の根拠がですね、これは授業目的が明確でないというそういう点にあるという。そこが学生のいわば問題意識、あるいは学生が高校までの過程で何を勉強してきたかということと同時に、教官サイドの技術的な問題も含めたそういう対応もちょっと考える必要があるかなということだろうと思います。でその上でですね、これは改革後の教養基礎教育の目的、それに関して学生にその幅広く深い教養と多角的でしなやかな思考力、総合的かつ自律的な判断力を培い、豊かな人間性を養う場というその教養基礎教育に関する秋田大学の位置付け、その実態との関連に関してですね、学生は実態としてそうは思わないというそういう見解を表明した学生が、これは718名中291名いるということに関しては、これは例えば取りたいと思うのに時間割の関係で取れないという、そういうこととか、それからあと実際の授業の内容が看板と違っているというような形で書いてある。そこはちょっと考える必要があるかなというふうに思われます。総じて学生の不満ということに関しては、例えば時間割の設定の問題であるとか、大体これは当然かなと、いう感じもいたしますが、さらにしかし具体的にですね、どういう点がまずいかという、これ自由記述の項を見ると、やはりちょっとうちの学生は幼稚かなという感じを持ちました。つまり先生がむかつくとか、それからおもしろくないとか、その手の憤懣の表明に終わっていると。だから何を期待して授業を受けたけれども、何が選べなかったという書き方をしている学生が一人もいないと。むかつく、おもしろくない云々という、そういう表明に終わっている。ある意味でそういう学生がいるということ自体が、やっぱり教養基礎教育が必要であるということの証明かなというふうにも受け取りました。

次に今度は教官の側ですが、これがやはり回答がないという、特に意見がないという、これが非常に多かったわけです。これはやはり31ページですけれども、そこはやはり少なくとも全

学出動体制ということですので、これは特に意見がないという、無回答というのは果たして看板と実態が合っているのかなということは少し考えざるを得ないのではないのかなと思いました。

次に3番目の項目ですが、申し上げたように各先生方の自己点検評価からなっておりますが、これざっと読ませていただいた結果から、これ私の記述では79ページから81ページにまとめてあることの内容ですけれども、やはりまず初年次ゼミに関してでありますけれども、当然のことですけれども、学部、学科、課程、専修とそういうことの事情を踏まえた対応性というもの、これは初年次ゼミは教養基礎なのかそれとも専門科目の一環なのかと、これははっきりした方がいいという、これ自由記述のご意見ありましたが、これは私ははっきり出来ないんだろうと思います。つまりそれはそれぞれの実施主体の事情、それから学生をどういう形で教育するかということの目的意識性に規定されていることで、これ全学的に統一するということは不可能だと思いますが、しかしこれは参加した学生が初年次ゼミに参加してこういう意義があったということについての統一的な基準というものはやはり必要かなというふうに感じました。ただその点に関して、これは本年度から初年次ゼミのテキストが作成されましたので、これは私の感想ですけれども、私が以前やった経験からして、初年次ゼミでどこに、その森に連れて行かれてグルグルと歩かされてどこにいつ出ていったのか分からないという、そういう戸惑いがやはり初年度にはあったと思います。少しは改善されたかなという感じがいたします。その上でどうしても問題になるのは成績評価、それから単位化の問題です。そこでこれは地域科学課程のゼミに関して、学生と教官の親睦を深めるという意味でバスハイクというのを設定したわけです。これはとにかくクラブとか何とかあってもこちらを優先させて欲しいという、そういうことで参加を強く求めました。そしてある参加をしていない学生に対して成績評価のところで、どういう作業をやってもらったかという、少し秋田の町並みを歩いて回って、もちろん博物館とかそういうところにも行ってもらって、そこで秋田の地域に関してどういうふう考えたのかと、それを2,000字程度でちょっとまとめたものを出して欲しいと。それはですからバスハイクに参加しなかった人に対してそういう作業を求めたものです。たまたましかし学生がやってきたというか食堂で会ったわけですけれども、その時に「あれは、バスハイクってのは飲み会でしょ」という。「飲み会に参加するも参加しないも自由じゃないですか」という。そこは多少やりとりあったわけですけれども、ただそれをですから単位化するというところまで、これはやっぱり必要かなということは議論の余地はあろうかと思えます。これは私の個人的な見解ですけれども、確かにバスハイクってのは教官側が提供すればサービスのようなものであって、それをですからサービスを受け取る自由もあれば拒否する自由もあって別にそれはいいんではないかというふうには私は個人的に考えています。ですからここは成績評価ということの問題と単位化ということ、これは議論になるかと思えます。その上でこれは先程教官のアンケートで教育文化学部がゼミの設定を考え直した方がいいということで、これは4年間どうするかということですが、やはり原則的に単位化の問題も含めてやるべきか、それともこれは方法的に改善を積み重ねていって、そこでこれは意義を確認するというふうになるのか。ただこれは3番目に関しては今議論するというのではなくて、4年間はやってみるとということの上のことだろうと思います。

それから次に目的主題別に関してですけれども、やはり教官のアンケートの中で従来の古典的な一般教育の発想から脱却していないという、これは批判も出されていますが、これもやはり何年も何年も結局こういう議論っていうのはやっぱりやらざるを得ないんだと思います。私個人としてはこういう議論というのはやめたいんですけども、ただこれは出てくるたびにそ

ういう議論というのはキリがないと。これは9月に山形大学で行われた東北北海道の一般教育の研究会に出てまいりましたけれども、同じような議論なんです。これはですから、どこかで到達度というのを意識的に設定するという以外に、ちょっとこういう消耗な議論っていうのはいつまでも続くのかなという感じを持ちました。ただこれは問題は依然としてあるということです。それからあとはいわゆるメニューの豊富化という点に関して、これは個別のアンケートで、今までそういう所在というものを知らなかったけれども、来年度からやはり自分としても担当したいという、そういう記述を寄せられた先生がおられました。ですからこれは、全学出動体制というのとはりあえず出来るところ限りでやってみるということが、やはりまずは当面の課題ではないかと思えます。

次に教官の個別の自己点検評価を読ませていただいたところでちょっと感想というか、問題点かなというふうに感じたのは、学生の基礎学力がかなり低下しているという、特に非常に苦労していると、高校でやるべきことをやっていないと。特にこれは数学、自然科学系の先生に多く見られました。これは必然的にそういう基礎的、やるべきことをやっていないという学生に対して、これは相当ケアをされていると。やはり負担がかなり重くなっている、そこをやはりどう考えるかと。これは言うならば学部が改組されて、専門教育も新たに増えているとその負担も増えていると、そういう中での負担であると、ということやはり考えていく必要があるのではないかと思います。それからオムニバス授業の問題ですが、これはやはりオムニバス授業というのはいきなりもうかつてのように自然系、あるいは人文社会と、ですから、やるべき事だから基本的な事だからやるということよりも、学生の日常的な問題関心にまず合わせよう。その上でいろいろな話をしよう、いろいろな材料を提供しようという発想だと思いますが、これは教官の側の反省からしても、つまり体系性の問題、どこまで問題点を掘り下げることが出来たかというところで、学生の方も多少そういう意見もありますが、実施する教官サイドもそういう問題をやっぱり指摘されていると。

それから3番目にこれはシラバスの問題であります、シラバスの充実ということ。これは一般論としてはその通りだろうと思うんですが、これは朝鮮語の先生が寄せていただいた回答の中で、初修の朝鮮語の学習にシラバスというのあまり有効ではないと。これはまあ私もその通りだろうと思うんです。ですからシラバスをフルに生かせる科目とやはりこのシラバスには限界があるというそういう科目があるんだと。それからあとこれアンケートを読ませていただいた中で、初修外国語の位置付けというか、動機づけと。そしてこの大学の学部の中でどこまで出来るのかという、そういう長期的展望ということもこれも明示する必要があるかなということが個別のアンケートを読ませていただいた中で私が感じた問題点でありました。以上です。

どうもありがとうございました。先程途中で司会進行を交替させていただきましたが、これで基調報告4人の方が終わりになります。これから後半の2名の方のご報告の内容につきまして話し合いを進めてまいりたいと思います。

ただ今中村先生から今までは大変満足のいった改革が行われてきた評価があった反面、やはり新しいことに取り組んだということにおいて、まだまだ検討すべき問題点も見えてきた、そういうお話しが細部にわたってあったように思います。話の順序といたしまして、基調報告2名の方につきまして、最初の増田先生のご報告につきまして最初に皆様方の方からご意見、コメント等をいただき、話し合いを進めていきたいと思いますが、どなたかいかががでしうか。

特に増田先生、先程報告いただきました教育方法等については医学部担当でしたけれども、全面的に増田先生がまとめて明確に記述し、先程の報告をしていただきました。ただ一言、多少ともかかわってきた者として補足させていただきたいと思うことがあります。それは担当部分の最後103ページから104ページにかけてですけれども、結論から言いますと休講の問題であります。特に教養基礎教育のうち教養教育に多いと思うんですけれども、依然としてですね。それは本学においてだけではないわけで、全国の日本の大学の旧態依然とした、しかし基本的に重要な問題であろうと思うわけです。休講をですね、どう減らしていくかというのと、あとは減らせないやむを得ない授業、当然制度上、個人的にもありますから。その場合に、大学の制度としてその休講の部分をどういう形で全学的に補っていくか。日本の大学の一部でも既に前期後期の2学期制にしてですね、夏休みの後半集中講義とかあるいは授業の補講、あるいは教員養成系であれば教育実習とか、夏休みの後半の部分に集中的にそういう期間を全学的な制度として取り入れている。それは一つの解決の方法であると思うんです。ただ一言もう一つですね、この休講を少しでも減らしていく、もっと制度上でなく自主的にという点も合わせて考えなければいけないと思うんですけれども、それは増田先生の先程の報告にもありました。学生のアンケートでも一番要望の大きかったのは授業目的内容の明確化、それがまずシラバスにですね、その概要ができるだけ詳細に、明確に記述されてあるべきだと思うんです。それはお互いにさらにシラバスに記載する内容ですね、さらに改善を求めていくべきだと思いますね。学生が自主的に履修科目を選択する保証をですね、少なくともシラバスで最大の情報を与えるべきと。そこからクラス規模の適正化ということもいくらか緩和されていく、正常化されていくと思いますし、よく言われる学力低下、これも本来の学力向上を図るための、さらには適切な成績評価ですね。実は私前期医学部のリスニングの方の授業を担当してきてですね、30回分のそれぞれの授業展開の項目を記してあるんですけれども、残念ながらもう一人の方がやむを得ない事情でかなりの回数休講にされているんですね。従って同じ問題で期末試験とか何かを実施出来ないという、評価法も結局別々な基準を設けざるを得ないということで実際困っていることもありますので、このへんですね、波及する一番基本的な根源というか、その休講の問題じゃないかと思うんです。そのへんこれから具体的にどう改善していくべきか、そのへん古くて新しい問題ですけれども、そのへん絞って今日はもう時間ないかも知れませんが、いずれそういう点を一つのテーマにさせていただければと思います。

えー、これは西江先生お答えになることですか、主管がお答えになりますでしょうか。

休講が現実に非常に多くて学生の不満もありますし、また連動してチームで授業をされている場合には評価上も支障を来すと、そういう場合の一つの解決方法としてどういう努力が考えられるかということだと思いますが、制度的なものも含め、また教官自体も意識改革が必要なところではありますが、いろんな学会等の関係もございますので、そのへん総合的に今のお話に対して何かお話をお聞かせいただきたいわけですが、これは主管の方からお願いしていいですか。

今回の自己点検評価の項目の中に欠けていたいくつかの問題がありますが、そのうちの一つが今佐藤先生から提起させていただいた問題だと思います。様々な問題抱えておまして、佐藤先生の指摘はその中の重要なポイントになる部分だろうと思いますが、教養基礎教育になって2年目ですが、その実態を明確に把握出来ていないというのが実情です。とりあえずシステムの上では休講等に備えて補講を行う期間を設けるということで今年から走りましたけれども、

その利用率もそれほど高くはなさそうです。休講につきましては教務企画室に公文書で届けるような、そういうシステムをとっておりますが、その実把握出来ていないような部分もあります。これは今すぐどうしろこうしろというようなことだと対応出来ませんが、いずれ検討しなければならない、これはシステム上の問題もありますし、教育を担当する教官の意識改革という問題面もありますけれども、検討しなければならない課題だと私自身も考えております。そんなところでよろしいのでしょうか。今日はちょっと集中してお話ではできませんけれど。

他に最初の増田先生の件につきまして何かございますでしょうか。

教育文化の川東です。増田先生が報告なされました小規模クラスの点で、これは質問でも何でもなくて、コメントをちょっと付け加えさせて下さい。

89ページから90ページにかけてなんですが、非英語系の外国語が割と並んでいるわけですね。ドイツ語、ロシア語、中国語等が並んでいます。増田先生はこれは外国語の特性というふうにおっしゃったわけですが、そうではなくてこれは後期に開講している授業がほとんどなんです。つまり表現法というのは主に前期に開講するのですけれども、落とされた学生のために一応後期でも取れるように各外国語が一つないし二つの授業をたてています。ですからもともとこのクラスにはたくさんの学生がこないということが想定されてまして、事実このくらいの数しか来ないんだと思います。ここには現れていませんけれども、例えばドイツ語会話表現法Bというのは非常に少ないんですけれども、もう一つある火曜の表現法になりますと70名というふうな数もあります。このアンバランスはですね、この時間帯しか取れないというふうな問題でそこに殺到したんだらうということだと言えます。平均的にみますと英語に比べますと、非英語というのはある程度人数が少ないわけなんですけれども、こういうふうなクラスの設定、それからそもそもいろんな外国語をそれぞれある程度の時間数立てなければいけないということだから余分にクラスを作っていますので、平均すればそうなるんですが、実際には50人、60人というクラス、中国語に関していえばかなり多いというのが実態です。ですから平均の問題だけでは割り切れないような問題がクラスサイズにはあるということを一言付け加えさせて下さい。

どうもありがとうございました。

数字を見る限りでは我々の理解が十分ではないところがあります。どうぞ。

医学部の吉村ですけれども、増田先生のご報告を伺っております、いわゆる成績の評価のところですね、確かに教養基礎教育ではレポートとか、それから出席であるとか討論であるとか、参加姿勢みたいなもので判断して非常にAが多くなるとかですね、あるいは教科によってはほとんどBであるとか、こういうことというのは、恐らく専門課程に入ってくるとそうないと思うんですね。ただ私は教養基礎教育の意義というのは非常に大きなものを持っていて、現在学力の低下であるとか、問題解決能力がないとか、学生にそういうのが期待されているわけですが、あるいは課題探求能力があるとか、そういうものを涵養するためにはいわゆる教養教育というのは非常に重要な意味を持っているというふうに思いますけれども、その中で新しい試みでなされているこの教養基礎教育の評価をするときにですね、こういうような非常にAが多くなって、90何%もAがあるということは普通はほとんどないと思うんですね。そういう意味でいきますと、教養教育の学生の評価というのはかなり厳しくする必要が、僕はあるのでは

ないかというふうに思うんですね。そういう意味で教養基礎教育の評価についてちょっとご意見を伺えればと思います。それからもう一つ、2番目には初年次ゼミというのは確か増田先生の表の中にはですね、改善を要するという意見を踏まえると非常に少なくとも初年度の、初年度というのは新しく教養基礎教育が始まった年の初年次ゼミではこれはあまり満足出来ないという人が多いのではないかと。これは各学部について52%ぐらい改善の余地があるというふうにおっしゃっておられるようなので、これについての今後の改善というのは是非必要であろうと思うんですけども、これについては既に3年目を迎えようとしているわけで、これについての現在の改善策と伺いますか、それについてどのような議論がなされているのかというのをちょっと伺いたい。

えーと、2点ございました。最初は評価との関係で、大変A評価に片寄っているという実情が一部ございますが、このことについてのご質問です。あの、増田先生何かお答えいただきませんかでしょうか。

評価はそういうふうになっておりますね。なかなか安定しないというか、どうして評価したらいいかわからないというような結果です。しかしながら、英語とかそういうふうなものに関してはきちっと評価されているというところで。これはやはりそういうふうなちゃんとした評価の出来るものは評価した方がいいと思いますが、難しいことが多いのじゃないかなと私は思います。この初年次ゼミはどこのページですか。これは改善の余地がありと教育文化学部が考えたんですね。その通りです。98ページです。これは中村先生の方でもそうですね。

では第1点はそれぞれの科目の評価基準があって出されているわけですが、なお検討の余地がございますでしょうけれども、この後12月あたりにまた成績評価のことでワークショップも予定されておるので、なおそちらでまた議論が展開すると思いますが、第2点につきまして中村先生の方からお答えいただくこととなりますでしょうか。初年次ゼミについて改善の余地が見られるという意見がありますが、この点につきまして何か話し合い等ございましたでしょうか。

98ページのところで回答させていただくと、これの有効ということは意義があったということと2番目の改善の余地があるというのは、初年度のことであるので不手際はあっても、しかし開設するということの意義はあると。だからもっといい方向で議論すべきであるということですから、これはやはり設定したことの意義が認められていると考えていいと思います。ただ問題は教育文化学部には、これは特徴だと思いますが、これは全く無駄であるというふうに回答を寄せておられる教員が13名いると。ですからこれは私が申し上げた、どういう形で、どういう目的で初年次ゼミを行っているか。専門教育と引き付けてやっていくのか、もちろんこれは単独ということはないでしょうけれども、そういう意義が、そういう専門教育との関連、動機づけで重視されている学部は教官の方も高いポイントを与えていると。それに対して高枚から大学への転換教育の方に力点を置いているところでは教官側も何をやっていいのかわからない。学生側もやっぱりシビアな見方をしていると、というのがアンケートの中で現れていると。

まず改善点はテキストを作ったということだろうと思います。学生が15回分で最初は単位の取り方であると。次は今度はバスハイクであると。今度はレポートの書き方、図書館巡りと。でそれがつまり根拠もなく引きずり回されて、ただスキップを凶っていると、そういうと

ところで、学生も教官もストレスがたまると。そこからテキストを作るということで大体ある程度の方向性は教官側にも見えるようになってきたし、また学生側も大体初年次ゼミの意義がどこにあるのかということが少しは見えるようになってきた。にもかかわらず私は教育文化学部では議論は残ると思います。そういうことに費やすエネルギーを別のところに使いたいという議論もありますから、これは教育文化学部に関してはまだ議論は続くということだろうと。

初年次ゼミにつきましては意義は認められているということですから、恐らくコミュニケーションの不全みたいなものが原因があったかもしれません。今後より充実したものにするための学生との伝達様式を密にするということが大事かと思いますが、この後実際の授業の報告もごございますので、中村先生も含めたお二方の内容につきましてご意見なりございましたらどうぞ。

恐らく今の4人の先生方に対する質問になろうかと思いますが、8ページをご覧いただきたいと思います。報告書の8ページですね。教育環境の整備でイからホまであるわけですが、特にロ、ハ、ニ、ホについてはどのように実施されて、それぞれの観点からどのように現時点では評価されるかということ、簡単でいいですので、私報告書読んでよく分からなかったものですからお知らせいただければと思います。

佐々木先生大変申し訳ございません。もう一度お願いします。

えーと8ページですね、2学期制の確立、それから教養教育の週2回開講、それから同一科目両学期開講、それから1単位科目開設と、これはどのように実施されててそれは現時点ではどうかということです。

そうしますとこれは主管の方にお答えいただけませんか。

実態というのはどれぐらいの数量になっているかというようなことを含めてでしょうか。具体的なデータ、実は今手元にありませんけれども、ロとハに関して言いますと1単位科目は目的主題別科目でかなりの数、開講しております。それに従いまして1期を前半と後半に分ける。当然2期も前半と後半に分ける。そういうこと含めてロのセメスター制度というのは一応実質化しているということだろうと思います。ハですけれども、週2回、これは外国語の方ですね、を中心に受講の自由度を上げるためにこれをとっている、あるいは授業の効率を上げるために集中的な授業開講を行うと。これは国際言語を中心にやっております。それからニですけれども、1単位科目及び2単位科目を中心にして目的主題別科目の何割ぐらいでしたでしょうか、半数まではいかないかと思いますが、1期に開講したものが2期にも同じ内容のものを開講することを原則にするということです。私の場合は従って、1期の前半と2期の前半に同じものを、1期の後半と2期の後半にやはり同じものを別の科目名で開講してます。通年いくと4単位開講の形で4つに細切れでやっているということです。数字はもしあれでしたら、お示ししたいと思いますが。

それではですね、いろいろご意見まだおありかと思いますが、一旦ですね、ここで基調報告に関しましての意見交換をこれで終わりとしたしまして、ちょっと時間が長くなりまし

たので、3、4分くらい休憩をとりまして、実際の授業報告に移らせていただきたいと思います。大変進行不手際で申し訳ございません。

続いて授業報告、3人の先生にご報告していただくということに移らせていただきたいと思います。最初に工学資源学部の大好先生をお願いします。

工学資源学部の大好です。あらかじめレジメ渡っていると思うんですが、レジメの後ろ4枚が私のワークショップの資料でございます。私は実は同じようなこと、3年前から初年次ゼミと同じようなことをメカノワールドという名前で行っておりまして、それを昨年度からメカノワールド初年次ゼミということで教養基礎教育科目の1つとして行っていくということ、うちの機械工学科の学生対象であります。4の1ページというのがありますがこれが実施スケジュールでありまして、幸い今年はこのスケジュール通り完了いたしました。そこでやり方は初年次ゼミのテキストにありますので省略いたしますが、4月14日に履修手続き等を説明いたし、また大学に入った時に大学ではどんなことをするのかということをもとに動機づけということでお話をし、4月20日以降各先生方の専門の中で現在どういうところが話題になっているかということをお話いただきました。うちの学部の特徴かもしれませんが、例えば5年経つと世の中で話題となっている工学技術の分野というものが変遷します。そういうホットな話題を学生にお話するというのが、一つの動機づけの道具でありまして、それを各先生方にそれぞれの分野でお話をいただくということをやっていたわけでありまして、で4の2ページの方はこれは、評価の中の51ページをコピーしたものでありますので、これは別途アンケートしましたそのアンケートを評価解析した時のその内容を書いてあります。後日読んでいただければと思います。そこです、4の3ページと4の4ページについて具体的なですね、どうであったかということをお話したいと思います。先程中村先生の方からいろいろとゼミの評価の方法とか在り方とか、あるいは各先生方の肯定否定の意見とかいろいろなことが出されましたが、それらをすべて何というか、よかったか悪かったかというのは具体的に言葉よりも実施して効果を上げることが大切だろうというわけでありまして、それで例えば評価の点であります、出席、あるいはレポートということを取り上げてやっていきますが、大学生活を始める中ではですね、やはり出席がまず最初にあるべきだろうと。いわゆる勉学に対する姿勢というものが問われると、いわゆる授業を大切にすることから入って行くというのが筋であろうと。それから各先生方のオムニバスの形式で行いますので、体系的な知識というものはこれは醸成されません。ですからいわゆる動機づけを目的としたものでありまして、知識の教育、あるいはそれぞれ技術の教育というものではないと私は思っております。ですから授業科目の区分けとして専門科あるいは教養科というような議論は成り立たないわけでありまして、目的がまず大学生活をよくすることが挙げられる。それではOHPについて説明します。

これはそれぞれの話題を自分で考えてきまして、それを模造紙にまとめて結論を発表するという形をとっています。それは前回にもご報告申し上げましたので、そういうような形で行われたということをお話しました。そこで、ちょっと見にくいかもしれませんが、お手元の資料の項目の4つのうちの1つであります。大学に入る前ですね、自分は何何になりたいという、はっきりとした将来のビジョンはなかったと、そういうふうなことを書いてあります。しかしながら時間が終わると、いわゆる初年次ゼミというシリーズのオムニバスの講義を受けて自分の選択は、いわゆる機械工学を学ぶということですが、自分の選択は間違っていなかったことを実感したと。まずこれがあります。それから自分は何何になりたいということは今分らない

いんですけれども、将来の選択の幅もさほど狭くなっただけではないということで機械工学を選んだ人が多かった。学生の意識の問題です。下の方にいきますと、とりあえず一通りやってみようと思う。いわゆる前向きな心の動きが出来てきた。そうすればそのうち分かるようになってくるだろう。これは高校までの教育というものがやはり受験ということの一つの至上価値観ということですべてが動いてきた。その中で入ってくる学生に最初から目的を持ってというのは本来無理な環境であったと、こういうことであるわけです。ですからいわゆるゼミという形をとっておりますが、目的をはっきりさせるといふ、意識を起こさせるといふことが非常に大切であるということがこれについています。紹介しますのはほんの一部でありますけれども、これを見ましてもそうです。これは学籍番号ちゃんと入っています。初年次ゼミの講義を受けて感じたことを考える。機械作りにおいての問題がとても興味深い話を聞くことができた。非常に耳新しい話であったということなんです。私たちにとってはそんなに新しいというふうには感じないわけですがけれども、高校までのそのやり方というか、経験からしますと非常に新鮮に学生には耳に響いたと。すばらしい機械が開発されているというその裏にはいろんな知識が必要であるということを知ってわかってきて、幅広い知識や技術を身につけていきたいという積極的な心の動きが出てきます。で、学ぶことが出来ることをうれしく思うとともに勉学や大学生活が有意義なものになるよう、そして自分の目標に向かって努力していきたい。これが言葉だけのことにならないようにですね、卒業するときに実はこのレポートをとっておきまして、卒業式の、例えば謝恩会みたいなところで渡したいというふうに考えておるわけです。で、4年間どうであったか、あるいは4年に進級するときの最初の4月のオリエンテーションの時に渡してもいいかなとも考えております。

この学生はある程度目的を最初から持っております。航空機が好きだと、宇宙工学をやりたいというような。ただ何をやったらいいかということがまだ分からない。しっかりやらなければならない分野というものの、機械の全貌というものが分かってきたということです。それから単にそのやらなきゃいかんという意気込みだけでなく、それにはやはり負担が大きいかもしれないという現実的な世界に目覚めているとこういうことです。「私は生まれてきたからには素晴らしくて新しい何か大きなことをやってみたい。」テーマが「機械工学に夢を抱いて」というような夢ということを入れましたので、学生はこういうことを書いてきたのだと思うんですけれども、やはり授業をやってですね、そういうプラスのファクターが出てきておる。非常に現実的な話で恐縮ですが、まずこれが実際なのですが、「このような夢、希望をより現実に近づけるためにも興味深く講義を受け、努力していきたいと思えます。」実はこういうことがですね、風の便りに広まりまして、全国の大学の問い合わせが既に来ております。これは非公式なんですけれども。どうなのかな、導入教育としてそういうことも考えてみようじゃないか、検討してみようじゃないかという識者の問い合わせがあります。インターネットに出しているというせいもあるかもしれませんが。やはり科目の枠組みとか、そういうことを超えてですね、学生に心動かせるようなそのものをやらなければ、やはりこれからの21世紀の教育は成り立たないんじゃないかと。何故かと言うと、生涯のテーマというような形で20年、30年というスパンで考えてきたことが、今は5、6年で終わってしまうという時代ですので。例えば今一つ例を挙げますと、最近4年間ですと、携帯電話の普及率を考えますと今年7月の統計で5,000万台の登録があるのです。人口1億2,000万が日本の人口ですから、5,000万というと相当な割合ですね。一人で普通の電話と携帯電話をやっているということがあるでしょう。この台数はたった4年間でそこまで行ったのです。一昔考えてみますと、ラジオ、テレビ始まった当初、100万台に達するのに何年かかったか。10年、20年かかっているわけですね。そうする

とですね、スパンが違うということなんです。そういう中でホットな話題をですね、例えば大学に入ってきた学生に提供して、いわゆる専門への導入かというような批判がありますけれども、勉強の意欲を高めるというのには非常にいい一つの例じゃないかと思うわけです。ただすべてがいいわけではありません。確かに評価の方法というものがある。どうすればいいか、それをこれから考えていかなければいけないというわけです。

いずれにしてもですね、その行動というか、私たちの活動の目的がはっきりしておれば、それからどういうインパクトがあったか、こういうことがやはり大切でありまして、これからは範疇とかバリアとかそういうものを、一つの隔離するのはやめていきたいというふうに思うわけです。専門とかあるいは教養とか、そういうものは一つの実施する上では必要かもしれませんが、そういうことは二の次だというふうに私としては個人として思うわけです。以上です。

どうもありがとうございました。

それでは引き続いて英語関係、外国語関係で教育文化学部村上先生お願いします。

英語の村上です。よろしくお願いします。自分の報告書は55ページにあるんですけども、同じことをお話しても仕方がありませんので、若干視点を変えてこの授業の位置付けないしは自己点検、自己評価というお話をしたいと思います。

まずですね、今回の教養基礎改革をやる前、1年次の英語の授業の7割以上が訳読、読んで訳すと、日本語に訳すというものでした。が、訳読の授業には1つ大きな難点があります。「ここはtheなんだ」、「このカンマは抜かせないんだ」といった英語そのものに対する説明をしてもですね、学生の関心は最終的にどういう訳文になるのかに集中してしまっていて、英語の勉強という効果が薄い、こういう大きな欠点がありました。そしてまた時代は発信型の語学教育、しゃべれる、書けるというところを目指すようになってきています。そこで今回の改革があったわけですが、手前みそながら、僕はこの訳読の授業というものの限界をひしひしと感じまして8年前から英作文ばかりやっておりますが。そこで何故リスニングかと申しますと、まず聞き取れないものはしゃべれないわけですから、しゃべるための下準備として聞き取るという作業が重要になってまいります。赤ん坊も初めからしゃべるのではなく、親が何をしゃべるのかを聞いてそれを脳みそのしわに刻み込んでしゃべるようになるわけですから、まずリスニングということが出てまいりますし、聞き取れば、相手がしゃべることをすべて聞き取ればあとはイエス、ノーさえ言えば人間生き残れるんですよ。ですから、サバイバル・スキルズとしてのリスニングということも言えるかと存じます。またですね、金額の授業、リスニングを止めてカンバゼーション、英語カンバゼーションとしちゃいますと、これは基礎力のない相手では授業が成り立たない、ないし授業の水準を相当下げなければいけないという事態に至ります。例えばですね、“What did you have for lunch?” “I ate katudon for lunch.” 大体この程度に達すればいいというようなことになるので、でしたら聴解力養成というところに重点をおいた方がいいのであろうというわけで、今1年次の英語教育はリスニングとライティングの2本建てになっております。

さてそこで今度、自己点検、自己評価ということですが、先程最初にお話申し上げましたように訳読の難点、英語に学生の関心がいかないといった訳読の授業の難点はある程度克服出来たと思います。それからですね、ビデオを使って授業をするとやはり学生、好意的に受け取ってくれますが、もちろんうかうかしていますとビデオが映っている時だけ学生の目が輝いて、

ビデオを消して練習に入ったら寝てしまうということになりかねませんから、これはしっかりと授業運営いろいろ工夫していく必要が当然あるわけです。それからですね、先程吉村学部長から能力別クラス編成というのは可能かというご質問をいただきましたが、今の状態では留学を希望してコツコツやっている奴から早く英語とおさらばしたいという奴まで1つのクラスに、1つの空間にいるわけですから、その習熟度の差をどうするか。習熟度の差に対応してですね、難しい話から簡単な話まで、落ちこぼれもある程度授業に参加出来るような工夫などなど必要となります。あとですね、自分は今回のリスニング、工学資源学部を担当させていただいたんですけれども、以前鉱山学部の英語の授業というのはかなり手間だったんですが、工学資源学部の学生さんの質が近年向上しております。殊に英語に対する基本姿勢というものが変わっております。昔は英語の授業なんて早く終わってくれ、英語の授業早く3年になってなくなってくれ、こうした学生ばかりだったんですけれども、かなり前向きな姿勢になってきてまして、非常に僕気持ち良く授業を担当させていただきました。反面ですね、教育文化学部は明らかに地盤沈下しております。ですから、今後ですね、教育文化の方の授業運営がいささか難しくなっていくことが予想されます。

さて最後、建設的に反省してみますと、我々にとって、語学の教師にとって結果を出すとは何かと申しますと、授業以外でもコツコツ勉強する奴を何人生み出せるかということだと思います。週2時間、あるいは3時間というのではやはり足りないんです。放射能たくさん浴びますと、被爆線量が多いとすぐに肺ガンや白血病になりますでしょ。それと同じで英語も量をこなす、長時間勉強するというのであればものになるんですよ。ですから今後授業以外で勉強する方法というのを学生に提示し、奨励していくということが大きな課題になるだろうと思います。教養基礎教育が修了した後も自分で勉強すると、そういったしますればトータルテストの成績も当然上がり留学への道も開けて行きますので自習の勧め、ないし学外教育機関、公共放送、あるいは語学学校ですね、そうしたところに関する情報提供というのも考えていかなきゃいけない、というところが我々の課題であると僕は認識しております。以上です。

どうもありがとうございました。最後に社会科学系から小賀野先生をお願いいたします。

お話をさせていただきたいと思います。もともと教育学部に法律学特殊講義という専門科目として開かれていたものでございます。ただ総合基礎教育科目、当時の一般教育の科目にも開かれていたわけですが、当時鉱山学部からかなりの学生、比率にして、学生が受講されておりましたし、医学部からも若干名の学生がみえておって中国からの留学生の方もみえておられて、教育学部だけじゃなくて広く関心をもたれているのかなあという感触を得ておりました。そうすることで今回の学部改組、改革に当たりまして、これを専門科目に止めておくのではなくてむしろ教養基礎教育として開放することが使命というところちょっと大袈裟ですが、望ましいのではないかというふうに考えた次第です。授業の目的ですが、法学の初心者が多く受講しておりますので、法学の知識も考慮しながら環境法とは何かということに終始したかと思えます。つまり環境法とは何かということについての基本的な情報をお知らせすると。ついては基本的な情報ですのでかなり抽象的なお話になりがちで、こうなりますとちょっと大変だと思いますので、できるだけ具体的な情報をお知らせすると。例えば今回はいくつかの著名な訴訟を例に挙げて、その訴訟の中身を紹介するという形で進めました。環境法の授業は全体として総論と各論とに分かれるということをお話しまして、総論の中ではこんなことをお話ししました。例えば学際的な法学分野であり、新しい授業科目であると。法学部でも環境法という授業が開講され

ているところは少ないんだとということ。環境法というのは法とつくけれども医学、工学の知識が非常に要求される、これは訴訟を見ても明らかであるということをお話しました。当学部は地域科学課程という非常に重要な課程を持っておりまして、その地域科学の中に環境法学が位置付けられるのであるということも繰り返しお話をいたしました。その他総論として基本的な権利侵害とか正義とか利益考慮とか違法性とか過失主義とか、そのようなお話をしたわけですが、各論としてそれらの情報を基礎として、いわゆる大気汚染にかかる東京訴訟というものを例に挙げてこれを中心にお話をしました。総論部分ではなかなかついてくるのがしんどいかなという感触を持ってお話をしておったんですけども、具体的な訴訟の話になると受講態度がかなり緊張するような状況が見えたかなというふうに、こちら側としては感じております。東京訴訟はご存じのように普通の営業する企業だけじゃなくて、自動車を作っている、ディーゼル自動車ですけども、その7社が被告になっているという初めての訴訟でして、これは今後の環境問題、環境訴訟を考える上でも非常に重要なものであると。この訴訟では医学、工学での観点もたくさん出されておりますし、そういった科学的な知見を基礎にして法的判断が行われるということをお話しました。ま、他にありますが、一つだけ東京訴訟などを例に挙げてお話をさせていただきますと、例えば被告らの行為が当該汚染地域にどの程度の寄与をしているか、その被告らの行為の全体を寄与度という数値で表して因果関係を割合的に確定すると。その場合には工学のシュミレーションという技術、科学技術をふんだんに利用いたします。四日市訴訟の時代にもそういうことが試みられていたんですけども、あまり当時の水準が今ほどは高くなくて裁判所はこれを信頼しなかったわけですけども、最近ではこういった工学技術を非常に高く評価して法的判断をしているところでもあります。また個別認定に至っては被害者の、例えばタバコをたくさん吸っていたなどの素因を考慮して損害算定の際にそれを考慮するという、ま、医学の知識を参考にして判断をしているということ。こういったことをお話をさせていただきました。で、これらの環境法の基礎に当たる部分についての情報がどれだけ受講生に説得力を持って聞いてもらえたかということとは甚だ心もとないわけですけども、ともかくも本来専門科目として位置付けられてゼミとか集中的な学習が行われることが多いこの科目についてこういった形で開講させていただいて、試行錯誤を繰り返しながら今後とも進めていきたいと思っております。自己点検ですけども、具体的事例に対してかなり眼の輝きが違っていたように感じておりますので、このあたりをもう少し重点的に取り上げて、例えば受講生同士で討論をしてみるとか、場合によってはビデオなんかをもっと積極的に利用して自分の目、耳、鼻、頭で問題を考えていくという方向に進めていくことが出来ればというふうに思っております。法学系の方には多いと思うんですが、なかなかこういったOHPとかビデオとか使い慣れていないもんですから、これらにつきましては先生方の授業等も参考にさせていただきながら、もっとダイナミックに進めていけるようにしたいというふうに考えております。またご教授いただければ幸いです。以上です。簡単ですけども。

ありがとうございました。以上を持ちまして本日の基調報告、個別授業報告は終わりとなりますが、司会進行の都合から大幅に予定の時間が超過しておりますために、プログラムにございます意見交換は大変恐縮でございますが時間の関係上割愛させていただきたく、今後この後懇親会も予定されておるようですので、そちらでもう一度ゆっくりお話できればと思います。プログラムの最後になりますけれども、閉会の挨拶を田上先生からお願いいたします。

最後に閉会ということですが、今日2時から始めまして、自己点検評価を読むという表題で

させていただきましたけれども、なにせ一年目の結果で、これ一応4年間継続して最後に出すというある意味では多少中途半端なところもあろうかと思えますけれども、これをベースにしまして2年、3年と積み上げてまして、よりよく教養基礎教育というものを充実させていただければというふうに思っております。今日は長時間にわたっていろんな貴重な意見を出していただきまして本当にありがとうございました。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。